

- 一、筆ふるきは、のぎ切れて心になはす。
- 二、紙は新しきを用ふべし、ふるきはあし。
- 三、硯に水をたくはへて用ふべからず。
- 四、水は早朝汲みて用ふべし。久しく水瓶に貯へたるはあし。
- 五、墨は古きに從ひ、光りをいだしすみやかなり。新らしきはねばる。
- 六、腕をつかひて後筆をとるべからず。
- 七、心身定まり心ゆるくして書くべし。
- 八、ねいきよくさまし、早朝に書くべし。文字分明なるべし。
- 九、天氣晴るゝときは心爽かなり。空曇る時は心鬱す。雨天には文字も其の心より出る故死すべし。

(五) 習字についての心得

習字には速成の法種々あれども、十字の内五字は、よくよく手本を見て習ひ、五字は其筆意を忘れぬやう、おのれが手に任せて書くは、大に速成の妙術なり。又、おのれが手癖より、其形の似つかぬ文字あるときは、手本の字を細く摹して其上に習ふべし。

一、習識と云ふ事あり。己が利發を以て文字の形を肖すれば、手跡を巧にする事遅し。心を手本にうつして、筆の扱をさざればよく似て、巧になることも早きなり。

一、神靈といふ事あり。字の形のみに書けるやうになるは、手習を爲さるには勝れども、速に習字の妙を得んと思は、靜に手本に心を留めて習ふべし。文字

に靈といふものあり、古語に曰く、心茲に在らざれば見て視えずと。己が心を打
込みたれば、其書きたる字にも靈魄のありて自ら人の稱へる所の文字を書き得る
なり。

一、四修と云ふ事あり。文字をまるくしつありて、正しく美しく、此四つを主
として習ふべきなり。

一、習情と言ふ事あり。自ら心を手習に留めて習ふ事なり。氣の懲りず、倦ます
好む意のあるやうにするが肝要なり。少し面白しと思ふやうになりたらば、其ま
ゝ休みて又後に習ふべし。幾度も斯の如くする時は、自然に熱心になりて、終に
は倦まぬやうになるものなり。

一、文字に懐といふ事あり。文字の内を廣く書くべし。心あざやかに見ゆるなり

懐の無きは見榮なきものなり。

一、筆勢と云ふ事あり。少し字の形あしきも筆勢あらば、見所あるものなり。

一、何等の藝たるを問はず、之れを修業するには、精神を入れること肝要なり。

筆の道も亦然り。精神を入れたるは墨色までもよく一見字の態度あるを知るなり
古へ義之の手の石に入り、弘法の字の木に入りしも、精神を入れて書きたる故な
り。

一、手習を爲す時は、右の手に重きものを持たぬやうにすべし。雨天の時に傘な
ごを持たざる位に注意すべし。

一、筆通の秘事。總て一文字の心より他になきものなり。筆情も筆法も是より起
るなり。

一、初學の者は、先機其他文房の具、置き處を定め、散亂せぬやうになすべし。是即ち心を正うするの基なり。硯の墨は程能く磨り、餘り濃は鋒毫といこほり、薄きときは心彩を破るといへり。

一、執筆の法は、義之以後、指を實にし拳を虚にすとあり。又手の中は卵掌とてふくらかに指を揃へて持つべし。堅きにあらずして指を實にすること肝要なり。又心正しく氣を定め臨書すべし。又肱と拳も共に強からず、弱からず、中和にすべし。

右の事項は、習字を爲すべき初學の者の第一に心得べき事なれば、先づ此等をよく記憶して後、古人の説などを讀み、其の中に、自己の心に適するものを探りて習ふべし。是れ淺きより深きに入る法なり。

六) 假名習字の心得

假名書きは多く女子にある事ゆゑ、女子の習字執筆法として述ぶべし。其の執筆法を言はば、提腕にて肘を輕からしめ、伸縮自在なるを可とす。女子は姿勢のよきを専らとすれば、其姿勢の醜くならざらんことを勉むべし。左に姿勢の美なる點を擧げ示すべし。

1. 筆鋒常に右眼の眞向にある事。

2. 左手の置きどころ。

3. 體を直くし、手本と双紙との位置を定むる事。

右の如き姿勢ならば、書する文字も自ら優美高尚ならむ。

假名習字の順序。假名を習ふにも順序あり。其の順序は先づ極めて簡易なる、い

ろはより始め、之れを熟して後、諸變體點畫の要を習ふべし。
 以上は單に假名の源體を習ふものにて、字々皆分離したるものなり。故に先つ此の源體の書方を習ひ得たるときは、二字三字の連續ものを習ふべし。此の法を學び得たらば、時々漢字を加へて文字に大小を生じ、且つ其連續中にも處々輕重遲速あるを要す。以上の諸法を熟したるときは、字體の變化と筆意の變化とを知るべし。字體の變化とは、假名變體のあらん限りを知得するをいふ。筆意の變化とは同字體にて種々の變化を筆意に得るを謂ふなり。

(二) 文章速成術

題して文章速成術と言ふ。而も敢て別に之が秘術妙方あるに非ず、速成畢竟は克く作文の要訣を悟了し迂遠ならぬにあり。須く悟入すべし。悟入の理は正に工夫の間に在るのみ。噫呼悟入、是れ作文の要訣。若し夫れ克く此要訣を悟らば一氣呵成必ずしも難からず左に心得べき要件二三を記して速成に資す。

(一) 文章と思想 文章は思想の表出なり。されば思想と文章とは決して離る可きにあらず。隨て今人の文章は今人の思想ならざる可からず。我書く文章は我思想ならざる可らず。然るに世人や、もすれば古人に泥みて、今は無き事實も古にあれば之を用ひ、現在つかはれつゝある言葉も古文に例なければ之を避くるが如きは

宜しからず。成べく假装的の弊を矯め、實地的の方針を取る可し。

(二) 作文題 夫れ此の如く、我書く文章は我思想ならざる可らずとせば、初學者の文題は成べく我身に疎遠なる題を避くべし。今爰に「吉野に花を見る記」なる題ありとせんに、實際吉野を知るの人に在ては、容易に書かるべきも、知らざる人は作例を見て模擬するか、又は全く想像的の文字を並べ立るより外なかるべし。文は遂に虚飾の偽文字となり終るべし。

(三) 文と卑語 世の文を授くる者、率ね唐宋八家の文を以て準とし、我邦の文書に至ては、概して章を成さざる者となせり。是れ其見る所文字章句の間に止まりて未だ終構の上に於て更にこれより大なるものあるを知らざるの過ちなり。茲に妙味ある一例を掲げんに、「馬喰が債を責むるの書簡」なるものあり。馬喰の

名を「龜」と呼ぶ。其書に曰く「金三兩馬代(單刀直入)右馬代(重疊矯健)くすかくさぬか(二項雙雄)これやどうぢや(一問)くすといふならそれでよし(即是)くさぬにつけてはおれがゆく(入主意)ゆくにつけては只おかぬ(一句主義)龜が腕には骨がある(何等の警語ぞ)看よ一緩句なきを。其間遺す不遺の二項を雙關とし、不遺の一項に歸し、末段骨あるの一句を以て他を悚動し來る。其氣魄光焰幾んど項羽宋義を責むるの語と馳騁せんとするの勢あり。往時頼山陽學生に詩を授くるに「大阪本町糸屋の娘(起)姉は十六妹は十四(承)諸國大名は弓矢で殺す(轉)糸屋娘は目で殺す(合)と云へる俚歌を以てせりと。亦以て文法の間々卑語の中に存するを知るべし。

〔三〕 繪 畫

繪畫は古昔より行はれたるものにて、我が邦繪畫の始めは佛畫に起れり。欽明天皇の朝以後佛工渡來して、佛像彫刻の下繪を書きしより人物畫起りしが如し。其の後奈良の都の頃より支那の唐代の畫風傳はり、巨勢の金岡出で、巨勢派を始む。金岡は、清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に仕へ、官大納言に至り、紫宸殿の障子に聖賢の像を書けり。支那より傳はりたるは北畫にて、其の後南畫即ち俗に文人畫と云ふもの傳はりて今にては北畫、南畫、國畫と爲れり。國畫は全く日本畫になりたるものにて、狩野派などは支那の北畫より來れり。次で土佐派も出で、住吉派もあり、四條風あり、圓山派あり、近ごろ寫生派あり、浮世繪あり、

り、別に又、洋畫家續々起れり。

古昔の大家 即ち左の諸人なり。

巨勢の金岡。狩野元信。土佐光起。狩野正信。全光信。全尙信。全水徳。土佐光長。全光信。全光則。全光芳。狩野探幽。僧雪舟。全雪村。全周文。春日正信。啓書記。本阿彌光悅。全光甫。鳥羽僧正。小栗宗村。曾我蕭白。兆殿司。曾我蛇足。雲谷顔等。

近世南北畫の大家 即ち左の諸人なり

與謝蕪村。池野大雅。平野五岳。田能村直入。日根對山。貫名海屋。田野村竹田。椿椿山。十時梅涯。岡田半江。瀧和亭。浦上春棨。原麻谷。山本梅逸。彭城百川。野呂介石。中林竹洞。岡田米山人。浦上玉堂。水原梅屋。帆足杏雨。福原五岳。

渡邊小華。小松雲涯。秦金石。圓山大迂。芳川笛村。富岡鐵齋。田能村小齋。河村雨谷。森琴石。田能村小篁。姬島竹外。猪瀬東寧。村田香谷。山本半村。佐竹永湖。十市王洋。大橋翠石。佐竹永陵等。

近世國書の大家

即ち左の諸人なり。

圓山應舉。松村景文。渡邊華山。谷文晁。松村吳春。森狙仙。長澤蘆雪。森一鳳。月岡雪鼎。岸駒。伊藤若冲。酒井抱一。柴田義童。山口素絢。尾形光琳。英一蝶。菊池容齋。岡本豊彦。柳澤淇園。西山芳園。圓山應震。石田友汀。駒井源琦。圓山應瑞。橋本雅邦。松村月溪。田中納言。司馬江漢。奧文鳴。幸野梅嶺。望月玉蟾。墨江武禮。上田公長。河村文鳳。柴田是真。浮田一惠。尾形乾山。岸岱。鈴木百年。原存中。雛屋玄圃。河邊曉齋。川崎千虎。岸連山。菅其翠。守住貫魚。久保田米僊。長澤蘆洲。望月金鳳。荒木寛畝。川端玉章。鈴木松年。野村文舉。

今尾景年。竹内栖鳳。菊池芳文。土佐光武。川邊御楯。山名貫義。巨勢小石。望月玉泉。谷口香嶠。狩野探美。山元春舉。松野霞城。荒木十畝。平井直水。高谷篁圃。久保田金仙。河合玉堂。鈴木華邱。寺崎廣業。中川盧月。御船綱手。村瀬玉田。湯川松堂。山本永暉。小堀鞆昔等。

女子國畫名家

即ち左の人々なり

奥原晴湖。橋本青江。野口小蘋。上村松園。河邊青蘭。馬杉青琴。前田錦相。佐久間棲谷。跡見花蹊。田能村小菊。橋本青蘋。跡見玉枝。守住周魚等。

洋畫名家

即ち左の諸人なり

黒田清輝。岡田三郎助。鹿子木孟郎。中村不折。淺井忠。織田東禹。山内愚仙。松原三五郎等。

古今浮世繪名家

即ち左の諸人なり

〔四〕速算術

速算注には種々あり。今其一例を示すべし。何の數にても二十五にて除るとき
例へば百七拾五圓を二拾五に除るとき、速算せんには、〇、〇四を乗くるなり。
さすれば二十五にて、ひま入れて除りたるも同じ商數を知る。此の理は左の如し
左の算式を見て、成る程同じ數理なりと合點ゆくべし。此の理さへ知らば、除
ると同じ理の乘法數を知りて、速算自在になるなり。

$$175 \div 25 = 175 \times \frac{1}{25} = 175 \times \frac{1}{25} \times \frac{4}{4} = \frac{1 \times 4}{25 \times 4} = \frac{4}{100} = 175 \times 0.04$$

されば百二十五にて除る代りに、千分の八、即ち〇、〇〇八を乗くるも同じと云
ふことを知らむ。斯くして乘法數を何程にても作り得るなり。
(一) 二にて除るときには、〇、五を乗すれば速し。

(二) 五にて除るときには、〇、二を乗すれば速し。

(三) 百二十五にて除るとき、〇、〇〇八を乗れば甚しく速し。

凡そ速算の工夫は、之れに越ることなからん。此の法は、一旦百分の幾個と云白
分々數に化し、それを小數に化して乘法數を生ずるなれど、分母を百分に化すと
も其分子の除切れずして、不盡數、回歸數等になるものは、到底此の速算法を用
ゐること能はず。例へば三十六に除るが如きは然るなり

$$324 \div 36 = 324 \times \frac{1}{36} = 324 \times \frac{1}{36} \times \frac{100}{100} \div 36 = \frac{1 \times 100}{36 \times 100} \div 36 = \frac{27777}{1000000} = 0.0027777 \dots$$

されば、〇、〇二七七七七餘不盡數を法數として乗ることは不可能なり。依て、
同じく除るにしても、三十六は、四に九の乘りたるもの、又九に四、六に六の乘

りたる數故、衆位除法の面倒を避け、除り易き單位除法を二回行ふとして、左の式の如く

$$\begin{array}{r} 324 + 4 \\ 9 \overline{) 324 + 4} \\ \underline{27} \\ 54 \\ \underline{45} \\ 90 \\ \underline{90} \\ 0 \end{array} \parallel 9. \quad \begin{array}{r} 324 + 9 \\ 4 \overline{) 324 + 9} \\ \underline{12} \\ 204 \\ \underline{16} \\ 384 \\ \underline{36} \\ 444 \\ \underline{44} \\ 0 \end{array} \parallel 9.$$

二回なれども早く除り得る法を用ゐるべし。是れ亦、除ると雖も、速算法なり。然るに十九、三十七、二十三、四十七、五十七などの數は二回以上に分ち難し、されど百六十二は、三、六、九の三數が乘り合ひたる數故

$$810 \div 3 \div 6 \div 9 = 5. \quad 810 \div 9 \div 6 \div 3 = 5. \\ 810 \div 6 \div 3 \div 9 = 5. \quad 810 \div 9 \div 3 \div 6 = 5.$$

百六十二の五倍の八百十個は三、六、九の何れを先にし、何れを後にするも、順序に關せず。答數五個を得るなり。されば九々の聲ある數は、皆二回分ちの法數として、二回に速算し得ることゝ知るべし。

〔五〕 英語早學

英語を知るには、先づアルハベットとて彼の國の二十六字を知り、次には字體母音、父音、子音、拗音、濁音、半濁音を知り、羅馬字綴りを試み、此の綴りを知りて發音し、之れの發音より進みて英語を發音するなり。其英語には、單語と會話とあり。單語を知りて會話に進む順序なり。

1. 「アルハベット」これは二十六字あり。我が邦の五十音字の如く、字々綴り合せて凡ての言語を書きあらはすなり。其の字形及び讀み方は左の如し。

A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z

Ā	Ī	Ū	Ē	Ō
カ	キ	ク	ケ	コ
サ	シ	ス	セ	ソ
タ	チ	ツ	テ	ト
ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ	ヰ	ヱ	ヰ	ヱ

2. (母音、父音、子音) 母音は a i u e o 五音にて、我が邦のアイウエオなり。此の他の二十一音は父音にて、父音と母音を合せて發出する音を子音と云ふ。一例を挙げれば母音の a と父音の s とを合すれば、sa と云ふ子音の生ずるが如し。羅馬字綴五十音は下の圖の如し。父音母音を合せて生ずるは子音なり。

草體文字

エー	ビー	シー
a	b	c
デー	イー	エフ
d	e	f
ジー	エッチ	アイ
g	h	i
ジー	ケー	エル
j	k	l
エム	エン	オー
m	n	o
ピー	キュー	アール
p	q	r
エス	ター	ユー
s	t	u
ヴァイ	ダブルユー	
v	oo	
エックス	ワイ	ズイ
x	y	z

N	A
O	B
P	C
Q	D
R	E
S	F
T	G
U	H
V	I
W	J
X	K
Y	L
Z	M

右を羅馬字と云ひ、イタリヤ體と草體とあり。其の上に俗に花文字と云ふ一體あり。通常は、字体は三種なれども、花文字共に四體あるなり。

(十 子)

Kinoe 甲	Kinoto 乙
Hinoe 丙	Hinoto 丁
Tsuchinoe 戊	Tsuchinoto 巳
Kanoe 庚	Kanoto 辛
Mizunoe 壬	Midzunoto 癸

(十 二 支)

Ne 子	Muma 午
Ushi 丑	Hitsuji 未
Tora 寅	Saru 申
U 卯	Tori 酉
Tatsu 辰	Inu 戌
Mi 巳	I 亥

(日本名盡)

I 伊.猪.亥	Iso 磯
Ichii 市.一	Yū 勇.惟
Ine 稻	Ima 今
Iku 幾.郁	Ishi 石
Iwa 岩	Roku 六.祿

3. [羅馬字綴り]

此の字を綴れば我が邦の言語も綴り得。左の如し

(濁音)

Ga	Gi	Gu	Ge	Go
Za	Zi	Zu	Ze	Zo
Da	Di	Du	De	Do
Ba	Bi	Bu	Be	Bo

(半濁音)

Pa	Pi	Pu	Pe	Po
----	----	----	----	----

音なり
ご語る
キヤナ
チャ、

aha	shi	shu	sbe	sho
ja	ji	jū	je	jo
cha	chi	chu	che	cho
hya	hi	hyu	he	hyo
kya	ki	kyu	ke	kyo
mya	mi	myu	me	myo
nya	ni	nyu	ne	nyo
rya	ri	ryu	re	ryo

濁音、半濁音も、父音と母音と合ひて、子音を生じたるなり。

Ida 井田	Inoshita 井下
Izawa 伊澤	Ihida 飯田
Ihino 飯野	Irokawa 色川
Iwata 岩田	Ii 井伊
Ina 伊奈	Ipe 伊部
Ino 猪野	Iguchi 猪口
Ihio 飯尾	Ise 伊勢
Iwai 岩井	Iwane 岩根
Iwaya 巖谷	Iwama 岩間
Iwate 岩手	Iwami 岩見
Iwase 岩瀬	Ihoji 庵地
Ihono 庵野	Iyenaga 家長
Itoda 糸田	Ichimura 市村
Ichii 一井	Ichiba 市場

4 [本式單語]

CARDINAL NUMBERS.

(數)

O.e 一

Hachi 八	Haru 春
Hitsu 初	Hina 花
Hama 濱	Jin 仁
Hi 平	Ben 辨.弁
To 都	Toyo 豐
Tora 寅.虎	Tō 藤.東
Toku 德.篤	Toki 時
Tome 留	Tomii 富
Toshi 年.歲	Tomo 友
Chika 近	Chiyo 千代
Chiu 忠	Chō 長
Chū 籌	Jū 重
Ri 理.利	Riyo 良.龍
Rin 林.麟	riu 柳
Riki 力	Nui 縫
Rui 類	O 應

(苗字盡)

Iba 伊庭 Inouye 井上

Twenty 二十
トシエンチイ

THE SEASONS,

(四季)

Spring 春
スプリング

Summer 夏
サママー

Autumu 秋
チーグム

Winter 冬
ウインター

THE MONTHS.

(月)

January 第一月
ジャニエアリー

February 第二月
フエブラリー

March 第三月
マーチ

April 第四月
エープリル

May 第五月
メイ

June 第六月
ジュン

July 第七月
ジュライ

August 第八月
アウグスト

Two 二
ツウ

Three 三
スリー

Four 四
フチャー

Five 五
ファイブ

Six 六
シックス

Seven 七
セブン

Eight 八
エート

Nine 九
ナイン

Ten 十
テン

Eleven 十一
イレブン

Twelve 十二
トゥエルフ

Thirteen 十三
サーチーン

Fourteen 十四
フチャーチーン

Fifteen 十五
ファイブチーン

Sixteen 十六
シックスチーン

Seventeen 十七
セブチーン

Eighteen 十八
エーチーン

Nineteen 十九
ナインチーン

The morning	朝(午前)
シ- モ-ニング				
The afternoon晝後
シ- アフタ-ヌ-ン				
The evening夕
シ- イブニング				
An hour	一時間
アン アワー				
Half an hour半時
ハーフ アン アワー				
A quarter of an hour	十五分時
エ クォーター オフ アワー				
A minute	一分時
エ ミニウト				
To-day	今日
トゥー デー				
Yesterday	昨日
エスタ-デー				
The day before Yesterday	一昨日
シ- デー ビフター-ア エスタ-デー				
To-morrow	明日
トゥー モロー				
The day after to-morrow	明後日
トゥー デー アフタ- ツーモロウ				
A week	一週間
エ ウィーク				
A month	一ヶ月
エ マンス				
A year	一ケ年
エ イヤー				
A leap year	閏年
エ リーフ イヤー				
A century	百年(一世紀)
エ センチウリヤ				
The holidays	祭日
シ- ホリデース				

September	第九月
セプテンバー						
October	第十月
オクトバー						
November	第十一月
ノヴァンバー						
December	第十二月
デセンバー						

THE DAYS OF THE WEEK.

(七 曜 日)

Sunday	日曜日
サンデー						
Monday	月曜日
マンデー						
Tuesday	火曜日
トゥズデー						
Wednesday	水曜日
ウヰズンズデー						
Thursday	木曜日
サーズデー						
Friday	金曜日
フライデー						
Saturday	土曜日
サターデー						

DIVISIONS OF TIME

(時 刻)

A day	一日
エ デー					
The day	一晝
シ- デー					

The Picture	繪圖
ジ- ピクチャー	エツ
The portrait	像圖
ジ- ポートレート	
The letter	書翰
ジ- レター	テガミ

DOMESTIC ANIMALS.

(家 畜)

The dog	犬
ジ- ドッグ	イヌ
The spaniel	獵犬
ジ- スパニール	カリイヌ
The greyhound	(全上)
ジ- グレーハウンド	
The cat	猫
ジ- キャット	チコ
The goat	山羊
ジ- ゴード	ヤギ
The sheep	綿羊
ジ- シイプ	ヒメ
The lamb	子羊
ジ- ラムプ	コヒツヂ
The cow	牝牛
ジ- コウ	メウシ
The ox	牡牛
ジ- オックス	オウシ
The horse	馬
ジ- ホース	ウマ
The courser	駿馬
ジ- コーサー	ハヤムマ
The colt	若馬
ジ- コールト	コウマ

New-year's day	元旦
ニウ イヤース デー	
Easter	耶蘇更生祭
イスター	
Whitsundays	更生後第七日曜
ホワイトサンデイズ	
Midsummer-day	夏至
ミッドサマー デー	
Michaelmas	祭日(九月廿五日)
ミケルマス	
Christmas	耶蘇ノ生誕日(十二月廿五日)
クリスマス	

COLOURS. (色)

The drawing	繪畫
ジ- ドロウイング	
The colour	色
ジ- カラー	
Blue	藍色
ブルイユ	アイ
Black	黑色
ブラック	クロ
White	白色
ホワイト	シロ
Red	赤色
レッド	アカ
Brown	茶褐色
ブラウン	チヤカツ
Yellow	黄色
イエロ	キ
Green	綠色
グリーン	キドリ
Gray	鼠色
グレイ	チンミ

(買物)

Customer: I want
 客 (1)私ハ(3)入用ダ } 蝙蝠傘が入用ダ
 an umbrella
 (2) 蝙蝠傘ガ

Clerk: This will
 番頭 1)コレハ(4)デセウト } コレナラ御氣ニ入
 suit you } トラウト存ジマス
 (3) 適スル 2) アナタニ
 I think
 (5) 私ハ (6) 思フ

Customer: Yes
 (1) ソウカ } ソウカコレデヨイ
 this will do
 (2) コレデヨイ

What is the
 (2) 何デ (3) アル } イクラダ
 Price ?
 (1) 價ハ (4) カ

Clerk: Two yen and
 貳圓ト } 貳圓六拾錢デス
 Sixty sen
 六拾錢

The ass ... 驢
 The mule... 騾
 The goose ... 鵞鳥
 The pigeon ... 鳩
 The duck ... 雌鵞

5 [會話]

(途上ニ於テ)

Good morning Sir ... 先生今日ハ
 (2) 今日ハ (1) 先生

Good morning. How
 今日ハ (1) 如何ニ } 今日ハ氣嫌ハ宜イカ
 are you ?
 (3) アル (2) 汝ハ (4) カ

I am quite... 私ハ全ク健康デス
 (1) 私ハ (4) アル (2) 全ク

well. Where do
 (3) ヨク (2) ドコニ (5) ナス } 今日ハ何處ニ居ルカ
 you live now ?
 (3) 汝ハ (4) 住ミ (1) 今 (6) カ

Our home stands
 (1) 我々ノ (2) 家ハ (9) 立ツ } 私等ノ家ハツノ建物
 on the right hand } ノ右側ニ立ツテ居マ
 (8) = (5) 右ノ (6) 手ノ } ス
 side of the building
 (7) 側ノ (3) ツノ (4) 建物

〔六〕 支那語及朝鮮語

(一) 支那語の部

總じて語學は、何國の語を學ぶにも、發音に重きを置くなり。支那語には必要なる四種の發音あり。それを熟して四聲の區別を得、而して發音を變化するに巧みなるべし。

1. 有氣音。これは四種中の發音にて 起、前、刻の如き音なり。他の三音は次の如し。
2. 無氣音。これは尋常平易に發する音なり。
3. 寬音。これは、年、春、點、片等の如き音なり。
4. 窄音。これは、明、様、城等の如き音なり。

●四聲。これは平聲、上聲、去聲、入聲なり。されど入聲は南方の聲にて、北方には無しと云へり。依て北方にては、上平聲、下平聲、上聲、去聲とせり。

●上平聲は平聲にて高低無き聲。下平聲は平聲なれども聲の尾り昂り、それを軽く抑ゆる如き調子の聲。上聲は發音烈しく音尾を長く引く調子の聲。去聲は聲が下に向ひて去り、消ゆゆく如き調子なり。而して入聲とは、音尾入るが如き調子の聲なり。

●變化。例へば長を長官などの長の意に用ゐるときには上聲を用ひ、長短の長にて長しと云ふ意には、下平聲を用ゐるの類なり。

●單語。(數)一イー。ニアル。三サヌ。四スー。五ウー。六リウ。七チー。八バー。九チウ。十シー。百バイ。千ヂエヌ。萬ソヌ。億イ。兆チャヲ。

(四季)。春チエヌ、テヌ。夏シヤ、テヌ。秋チウ、テヌ。冬トン、テヌ。
(四方)。東トン。西シー。南ナヌ。北ベ。

(時辰)。黎明レイミン。(早朝)早晨ツアヲチエヌ。午前(前半天)チエヌバヌテヌ。
正午チヨン、ポー。午後(後半天)ホウバヌ、テヌ。白晝バイチウ。夜イエーリ。
夜半(半夜裡)バヌイエーリ。今日(今天)チヌテヌ。明日ミンテヌ。明後(後天)ホ
ウエ。昨日(昨天)ツオーテヌ。一昨日(前天)チエヌテヌ。毎日(每天)メイテヌ。
又は天天兒テヌテヌル。

(天文)。太陽を日頭リート。太陰を月亮ユエリヤン。星(星辰)シレシン。大氣
ターチ。雲(雲彩)ユイヌツアイ。雨ユーイ。風フラン。雪シユエ。虹カン。雷
レイ。電光(閃)シヤン。

(地理)。地球テーチウ。海ハイ。大洋ターヤン。島ハイタヲ。陸路ハヌル。湖水
フウ。港(馬頭)マート。山シヤヌ。河ホー。谷(山瀾子)シヤヌシエヌツ。
野(曠野)コオンイエー。

(人類)。人レヌ。男子ナヌシ。女子ニユイツ。女の兒(女孩兒)ニユイハイル。子
供(小孩兒)シヤヲハイル。父(父親)フーチヌ。母(母親)ムーチヌ。兄(哥哥)コー
コー。弟シユンテー。姉チエーチエー。妹メイメイ。夫チャンフ。又は男人ナヌ
レイ。妻(媳婦兒)シーフル。

●會話。訪問の挨拶語にては、

令堂老太々好啊リンタンヲオタイタイハラア。

右は「御母様御様嫌宜しく御座いますか」と言ふなり。

是好シーハラ。これは、「ハイお蔭で達者で居ります」との答なり

(二) 朝鮮語の部

音字は九十九個あり。子音、母音、餘音、輕音、激音、重音、重激音あり。
單語。(數)一個ハーナ。二個ツウル。三個セー。四個デー。五個タソツ。六個ヨソツ。七個イルコブ。八個マトル。九個アホブ。十個イヨル。一百イルベーク。一千イルチョン。一萬イルマン。一億イルオク。

(日時)。今日オーヌル。明日ネーイル。明後日モーレー。前日チヨール。昨日オーチヨイ。一昨日クーチヨツコイ。毎日マイイル。朝アツチム。晝ナーツ。夕チヨールニヨク。夜バム。未明セイビヨク。時刻シーカイク。今年クムニヨン。明年ミヨケニヨン。去年コーニヨン。前年チヨンニヨン。翌年イーブムハイ。毎年

マイニヨン。半年バンニヨン。一昨年チャイチャクニヨン。

(四季)。春ホム。夏イヨールム。秋カーウル。冬キヨウウル。

(人類)。親ヲポーチ。母ヲモートニ。長男マツアツル。長女マツタル。娘ツルチャアシク。小兒アヘー。姉ヌーイム。妹ヌーウー。妾チヨブ。

(天文)。日ハイ。月タル。星ビヨル。風ブグ。雲クールム。雪ヌーン。雨ビト。露イースル。霜リーソト。天ハーヌル。

(地理)山サン。川ナイ。海バーター。島ソム。港ポークター。湖水ホーシユー。嶺チャイ。坂コーカイ。瀑布ボクポー。

(會話)。コートトウナト、カーケツソトヨ。「最早お立になりますか」マールン
オークローイツソトヨ。「馬は何處に居ますか」

ライターインスンチー、チャル、モールテツツ、マースン、ムンバークウー、
 マーバグチーバー、イツター、ハーヲブテーター。「何處かは能く知りませんが、門
 外の馬屋に居ると言ひます。」
 イ、クローリー、ハーヲリーター。「唯承知しました。」

〔七〕 簿記法

こは會計帳簿の記入に關する術を云ふ。簿記は所謂貸借關係を明瞭に計算處理
 するを以て目的とする記帳の法なり。而して簿記には單式と複式あり。單式は頗
 る簡單なるが複式は名の如く方式複雑なり。然し普通に簿記といへば概して此複
 式を云ふ。又簿記は其事業の異なるに隨ひ商業簿記、銀行簿記、會社簿記、工業
 簿記、官廳簿記若しくは家計簿記等に區別せらる。されど其原理は一なり。
 (一)勘定科目。貸借の目的物には有體物あり無體物あり。また有形の原因あり無形
 の原因あり。すべて之れを取引の種類によつて分ち、各々其取引に科目の名稱を
 附す。これを勘定科目と云ふ。勘定目的の設定は各自の便宜に従ふものなれど、

ことを識るなり、これは他科の英語早學のところに述べたり。

(三)速記用の文字。これは人の發音に合ふ假名文字に代ふる象形文字なり。此の文字は一種の法を以て割出し、横線、縦線、斜線、曲線形の文字なり。

(四)連綴語速記。これは、平聲、長聲、短聲、急聲の四種に分つ。

(五)疊呼速記。此の綴り方は、輕單、重單、輕複、重複の四種に分つ。

(六)縮語速記。これは母音の各個に依り、中間に母音挾まるとき、拗韻の縮音に依り語の長、短、緩、急に依りて種々に分る。

(七)前字。これは語意を變るとき、前に簡單に附記する速記なり。即ち其の際を形容するなり。これにも鄭重、複數等の種類分る。

(八)複字。これは語の後へに附加し、語意を成すものなり。

(九)習字。速記文字を書き習ひ、又、先輩が速記文字のみにて、書きあるものを讀むことを練習するなり。

(十)讀方練習。これは、速記文字のみの書面を、普通文字の書面に復文し、又、速記文字に書綴り、達者に讀み得る様に練習しあぐるなり。

(復文)。速記文字を達者に書き得、速記文字の書を達者に讀み得る伎倆を得たれば、實際速記し、それを復文して、普通文字の語文とするなり。

(句讀及び校正の符號標)。速記文字の他に、種々符號標あり。凡そ左の如し。

- イ文首標。 日本名標。 ハ地名標。 ニ連字標。 ホ句讀標。 ヘ段落標。 ト廢文標。 チ引用標。 リ喝采標。 ヌ承前標。 ル未完標。 ヲ否不標。 ワ完了標。 カ添註標。 ヨ疑問標。 タ再用標。 レ分字標。 ソ合字標。 ツ除段標。 ネ轉語標等なり。

〔九〕漢詩

我邦の和歌に對して支那に歌あり。古詩は、彼の五經の中の詩經にあり。五言絶句の詩は前漢の時代に始まり、夫れより七言律など起りたり。

(一)種類。古詩、律詩、絶句の別あり。此の他樂府も亦詩の一體として擧ぐるを得べし。されど普通に世に行はるゝは、律と絶句にして、古詩は多く行はれず。故に茲に律と絶句とのみに就て述ぶべし。

(二)音韻。漢字は其の音韻に依りて之れを平、上、去、入の四聲に分ち、總ての字は各四聲中の何れにか屬す。但し通韻とて二聲に通ずる字も有り。又、同一字にても意義に依りて音韻を異にし所屬を二三にするも有り。平聲は上平聲と下平聲

とに分ち、一より十五までの十五韻とす。

1. 上平聲。東、冬、江、支、微、魚、虞、齊、佳、灰、真、文、元、寒、刪。

下平聲。先、蕭、肴、豪、歌、麻、陽、庚、青、蒸、尤、侵、覃、鹽、咸。

2. 上聲。董、腫、講、紙、尾、語、虞、齊、蟹、賄、軫、吻、院、旱、潜、銑、篠、巧、皓、哿、馬、養、梗、迥、有、寢、感、琰、養。

3. 去聲。送、宋、縫、冥、未、御、遇、霽、泰、卦、隊、震、問、願、翰、諫、霰、嘯、效、號、箇、馮、漾、敬、徑、宥、沁、勘、艷、陷。

4. 入聲。屋、沃、覺、質、物、月、曷、黠、屑、藥、陌、錫、緝、合、葉、洽。即ち四聲の總計一百六韻あり。漢字は總て此の中の何れかの韻に屬す。斯て平聲に屬する字を平字、他の三聲に屬する字を仄字と定む。

(三) 平仄法。文字の掛置は、必ず平仄法に由らざるべからず。平仄法には平起法と仄起法とあり。左表に示す。○は平字、●は仄字、○は平仄何れにも通用す。上列を五言絶句とし、下列を七言律とす。

五言平起

○	○	○	○	○
●	○	○	●	○
●	○	○	●	○
○	●	○	○	○
○	○	○	○	○

七言平起

○	○	○	○	○	○	○
●	○	○	●	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○

五言仄起

○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○
○	○	○	○	○

七言仄起

○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○
○	○	○	○	○	○	○

平从法の要は、二四不同、二六對とて、第二と第四とは平仄異にし、第二と第六とは相同じとす。又、右の表中に傍記したるは踏落しと稱する變則法にて、五言絶句は此の法に據ること多し。律詩の平仄は絶句の平起、又は仄起を二つ連ね、第五句を踏落しにするなり。

(四) 起承轉結。第一を起句と謂ふ。即ち詩思を提起し、第二の承句は之れを受け、第三の轉句は詩意を一轉し、第四の結句にて前三句の意を綜合するなり。

〔10〕和歌

和歌の道は敷島の道と云ひ純粹なる我が國風として上下ともに詠じ、互ひの思想減情を吐露するの具と爲す。和歌の中には長歌、旋頭歌、今様など種々あれども最も普通なるは短歌にして、國音の文字三十一よりなるなり。歌をよむ者は先づ國語の假名づかいと、てにをはとを知り、詞の掛りと受とをも覺わ、山をよむときは、あし卑の、と云ふ枕詞を前によみかくるなり。

(掛りと受)。例へば、花はと掛れば散りけりと受け、花ぞと掛れば散りけりと受け、花こそと掛れば、散りけりと受くる定まりを知るなり。は、けり。ぞ、ける。こそ、けれ。是れなり。

活の段四			
飽	押	打	縫
(か)	(さ)	(た)	(は)
す	で	じ	ぬ
まし		む	ま
(ら)	(ま)	(は)	(た)
し	つ	け	け
る	る	む	り
し	ぬ	な	き
か	る	ば	つ
(る)	(む)	(ふ)	(つ)
め	ら	べ	ら
り	ん	き	な
より	を	に	まで
(れ)	(め)	(へ)	(て)
ば	ど		
ども			

(四種のはたらき)。と云うは、四段の活、一段の活、上二段の活、下二段の活、此四つなり。さて、これらの名、もとよりあるにあらざれども、事をわかちいは、名目なくては、たよりあしければ、今かりに付けたるなり。四段の活とは、かきくけ、さしすせ、と第一の音より四の音まで次々四段にあかむ、あき、あく、あけ。おさむ、おし、おす、おせ。などのはたらきをいふ。

の音には拘はらざるなり。さて、其はたらきを、總て一音にてい、おん云ふより外なければ、この活はたらきことばいとすくなし。

上二段の活とは。き、く、くる、くれ、ち、つ、つる、つれと、第二の音、三の音二段にておき、おく、おくる、おくれ、とち、とづ、とづる、とづれなど、はたらくを云ふなり。くる、くれ、つる、つれのるは、一段の活かつの所に云へるが如し。この活はたらき詞ことばも多からず。

下二段の活とは。く、くる、くれ、け、す、する、すれ、せと、第二の音と第四の音との二段にて、うく、うくる、うくれ、うけ、やす、やする、やすれ、やせなど、活はたらくを云へり、くる、くれ、する、すれのるは、これも上うへにいへるに同じ。この活はたらきの詞ことばもまた、いとおほし。

又この四種のはたらきのおなじたぐひにて、いさゝか活はたらきさまの異なるあり(下略)
(歴代和歌新古の例)。これを左に示さん。

八雲たつ出雲八重垣つまこめに、八重垣つくるその八重垣を。素盞雄尊

田子浦にうちいで、見れば白妙の、ふじの高ねに雪はふりつゝ。山部 赤人

世の中にたわてさくらはるのなかりせば、春の心はこころのぞけからまし。在原 業平

駒とめて袖うち拂ふかげもなし、佐野さののあたりの雪の夕ぐれ。藤原 定家

初瀬野や里さとのうなるに宿やどへば、霞あせめる梅うめのうち枝えだぞさす。僧 契 仲

(狂歌)。和歌にも古來俳諧はいかい的てきしやれたるあり。是これが轉化てんくわして狂歌きやうかとなれり。

おふじさん霞かすみの衣ころもどかしやんせ、雪ゆきのはたへが見みたうござんす。蜀山人
淺間山あさまやまなせそのようにやきなんす、いわうくが積つみり積つみりて。詠人えいじんしらす

ほど、ぎすなきつる方をながむれば、只あきたるつらぞ残れる。

平郡 實梯

詠人しらす

同

橘 洲

蜀 山人

あけら菅江

勞農ろしや人曰く

わが國はなまこのやうになりけり、それが頭か尻かわからず。

魚臥山人

〔二〕 俳句

(一) 俳句とは何ぞ

俳句は俳諧發句也。俳諧とは原と滑稽の意にて、之に邦訓を施せば洒落とか
又は諧謔とか讀むべきものとす。故に支那の詩に俳諧体のものあり。又我邦の和
歌にも俳諧体なるものあり。既に古今集に、「秋風に綻びぬらん藤袴つゞれさせ
てふきりくす啼く」。斯く詩歌に俳諧体あるより、連歌にも亦同じく俳諧体な
るもの起りて、菟玖波集に、「奥山に船こぐ音や聞ゆなり」とある發句に、紀貫之
が「なれる木の實やうみわたるらん」と連句せしは是れなり。其の後俳諧連歌なる
もの、後土御門天皇の御宇、世に鳴る。爾來俳諧の連歌漸次流行し、荒木田守武

杉田望一等出で、

日本記や天地一枚明の春。

守武

春立つやにはん愛たき門の松。

守武

夫と聞く空耳もがな郭公。

望一

これ等の發句を示し人々百韻を連れしとぞ。

現今いふ所の俳句とは、俳諧連歌の發句を指すなり。

(1.) 松永貞徳始めて俳諧連歌なるもの、式を立て、

雪月花一時に見する卯木かな。

貞徳

此の体の發句を吟せしより、門人又其他も

是はくと許り花の吉野山。

貞室

黒炭や焼かぬ昔は雪の枝。

忠知

斯る高尚なる吟詠となり、其の實を言へば、俳諧に稍や遠くなれり。

(2.) 浪華の西山宗因は、大いに貞徳の門派を誇り。

浪華津にさくやの雨や梅の花。………宗因

などの發句を吐き、俳諧の俳諧たる所を稱ふるも用ゐられず。遂に東武に去りて檀林風を起す。關東は悉く之れに靡き、俳諧とし言へば檀林の一風のみと思ふ者あるに至れり。

(3.) 俳諧正風。この時北村季吟の門人に、伊賀の上野の藤堂の藩士、松尾宗房なる人あり。事故ありて弓箭を棄て、風流人となりて東武に行き、夫の俳諧の連歌を觀るに檀林の一派其の隆盛に伴れて邪路に入り、卑俗極度に達して聞くに忍びざ

るに概嘆し、斯の邪風に對し、俳諧体連歌の正風を起し、芭蕉庵桃青と稱す。

古池や蛙飛び込む水の音。……芭蕉

道端の權は馬に喰はれけり。……同人

孰れも此の体にて、哲學の思想に由り、文外に餘情の垂んたるものあり。關東の

人にて斯道に遊ぶ士は、争ひて師と仰ぎ、寶井其角、服部嵐雪等を弟子とし、山

口素堂等を朋友とす。暫時にて檀林は滅亡して正風に歸し、尋で海内に普及し、

俳諧と言へば、蕉翁の荒れを汲まざるべからざるが如くなれり。

(二) 切字について

發句には必ず切字無かるべからず。是れ右來の規則なり。切字は一つに限る。

二つあるは二段切れ、三つあるは三段切れと云ひて、故人の作には無きにはあら

ざれど、これは深き意味あることにて、先づ斯ることは初心の輩は、遠慮して爲さるものとするべし。又發句には心の切れ。玄妙の切れ。挨拶の切れ。無名の切れ。など言ふものありて、切字を用ゐずして切るゝ句あるも、こは例外なり。

(1) 例外。左の如きなり。心こころの切きれ。いざさらば雪見ゆきみに轉ころぶところまで。……芭蕉

玄妙げんめうの切きれ。あかくと日はつれなくも秋あきの風かぜ。……同人

中なかの切きれ。やすくと出ていざよふ月つきの雲くも。……

挨拶あいさつの切きれ。人に家いへを買かせて我われは年とし忘れわすれ。……

無名むなの切きれ。一家いけ皆みな杖つゑに白しろ髪かみの墓はかまゐり。……

をまはし。米こめくるゝ友ともを今宵こよひの月つきの客きやく。……

にまはし。

桐の木に鴉啼くなる塀の内。……………

二段の切。

面白し雪にやならん冬の雨。……………

三段の切。

子供等よ晝顔咲きぬ瓜剝ん。……………

字切れ。

奈良七重七堂伽藍八重櫻。……………

大まはし。

唐崎の松は花より臙にて。……………

是れ等は、先哲が所謂いろは四十七字は孰れの字にても其の使ひ方により、切字とならざるは無し。とある類にて初心の輩に蝶々と説くも解するに難し。

(2.)やの切字。左の種々なり。

初句のや。

古池や蛙飛び込む水の音。……………芭蕉

尤も此のやは和歌に無き格にて、特に俳句のみに有りて、なる哉の意味なりとも

いへり。いかにも然もあるべし。古池なる哉蛙と……して吟ずれば其の意義能く通ず。

二句のや。

蛇の助の怨みの鍾や花の暮。……………常則

三句のや。

露とくく試みに浮世濯ばや。……………

疑ひのや。

亡き人の小袖も今や土用干。……………

はのや。

白魚や黒き目を明く法の海。……………

此のやは、

白魚はと云ふ意に通ふなり。

すみのや。

むざんやな兜の下の蟋蟀。……………芭蕉

此のやは、むざんなりと言ふ意味なれば、むざんやと而已言ひて宜しきに似たれど、然しては初五文字に足らず。且つ語勢の弱きに依り、斯くなの字を添へしな

り古來すみのやと稱しつゝ來れり。如何なる意歟。

口合のや。是れや此の煤に染まらぬ古格子。……芭蕉

此のやを口合のやと稱し來れども、之れも亦其の意味を解するを得ず。

名所のや。難波津や田螺の蓋も冬籠り。……同く

此のやは和歌の初五文字のやと似て非なるものにて、夫の初句のやと別つこと無し。然るに何が故にや此の名稱を附したり。其の意を解せず。

(3.) 諸種の切字。

じ 散る花の外にはあらじ春惜む。……枉兮

かな 雪月花一時に見する卯木かな。……貞徳

むがな 黄菊白菊其外の名は無もがな。……嵐雪

か・も・け・り・あ・り・け・れ・ら・め・た・り・な・り・そ・ろ・な・に・き

花守は魔るゝかも夜の嵐。……枉兮

湖の水まさりけり五月雨。……言水

白雪の中に聲あり春の人。……枉兮

少しなら懸るも可けれ月の雲。……同

斯るとき武士は死ぬらめ年の暮。……同

姑の十八見たり土用干。……同

先線に春は行なり蟹峨御室。……同

風透も能く建て候夏座敷。……同

九年何若界十年花衣。……祇空

落椿風の罪では有ざりき。……枉兮

其 二

右を望めば大砲ぞ、
天に轟くいかづちの、
猛り立てぞ進むなる、

其 三

前も左も亦砲ぞ、
響の如く凄しや、
死地にこそ入れ鱔の口、

共に射出す砲聲は、
彈丸雨飛の間にも、
勇んで乗入る六百騎。

抜けば玉散る刃をば、
敵陣近く乗かけて、
煙の中に飛込みて、

其 四

皆諸共に振上げて、
大砲方を撫で斬す、
烈しく陣を破るなり。

太刀の早業見事なり、

敵の軍勢たちくと、

遂に障ふる事ならず、

ひら／＼ばつとむら崩れ、
馬の頭を立て直す、
残るは最も僅なり。

其 五

以前に進みし六百騎、

あの勇ましき武士の、
今の稚子生立ちて、
頭に霜を戴きて、
敵の陣へと乗入れる、

世に香しき其譽れ、
とる年あまた重なりて、
孫彦玄孫多き時、
其故事を語りなば、

手柄は長く傳へなん、
腰は梓の弓となり、
六百人の豪傑が、
末代迄も名は朽ちじ。
(おはり)

(二)石童丸。邦人の作なり。
月に叢雲、花に風、
大隅薩摩で六ヶ國、

散りて果敢なき世の習、
採題守護を掌る、

筑前筑後肥前肥後、
文武二道に秀でたる、

加藤左衛門重氏は、
直ちに高野に入り給ふ、
石童丸と名を付けぬ、
尋ね給へど知れざれば、
風の便りに聞きし故、
紀州を指して出でにける、
漸く二人は紀の國の、
石童丸と母君は、
明日は深山に登りなば、
宿の亭主は聞くよりも、
娑婆の無常を感じつゝ、
御臺千里は程もなく、
哀れなるかな父親を、
石童十四の春の頃、
母上様と諸共に、
最早や日暮れの旅の空、
高野の麓の學文路宿、
永の旅路の物語り、
父上様に逢はるゝと、
斯る一室に立出で、
故郷に妻子を残し置き、
玉の様なる子を設け、
十三年が其間、
父は高野にお在すると、
慣れぬ旅路も厭ひなく、
切那も急げ石童と、
茶屋の玉屋に宿を取り、
如何に石童聞き給へ、
何心なく語りける、
申上ますお客様、

此御山の定めには、
婦人は御山に登られず、
なふ情なや石童よ、
父は人より脊高く、
それを證據に訊ぬべし、
母に安心させ給へ、
杖を便りの高野山、
三鉢の松に五鉢の杉、
日も入相の其頃は、
金の鎖を手に取りて、
弘法大師の戒めに、
聞きて母親驚きて、
母は御山に登られず、
左の眉に黒子あり、
假令逢ふと逢はずとも、
云われて石童涙ぐみ、
鳥も通わぬ屏風岩、
悪魔も懼るゝ不動坂、
瀧の不動に立ち寄りて、
知らせの鰐口打ち鳴らし、
女人禁制し給へば、
吾子の袖に取り絶り、
汝一人で登られよ、
筑前詭りの人あらば、
必ず爰にかへり来て、
泣くゝ別れ立ち登る、
善悪二つの分け柳、
通り過ぐれば妙薬師、
嗽 手水に身を浄め、
最も殊勝に手を合せ、

南無や大悲の不動尊、
 吾が父上の此山に、
 何卒逢はせて給はれど、
 哀れなる哉石童は、
 五更の空も明け渡り、
 又も御山を登り行く、
 佛菩薩を伏し拜み、
 小高き所に駆け上り、
 三日二夜の日も過ぎて、
 思ふ心も後や先、

并に御山の御開山、
 在する由を聞きし故、
 最も殊勝に伏し拜み、
 腕を枕に笠屏風、
 東雲鳥と諸共に、
 九百九十の寺々や、
 父の在所を訊ぬれど、
 遙に谷間に立つ煙、
 一度は麓に歸らずば、
 無明の橋に差し懸る。

吾れの是迄來りしは、
 遙々尋ね來りしよ、
 其夜は御堂に打ち臥して、
 三更四更の夜も更けて、
 それより御堂を立出で、
 峰谷々の此處彼處、
 父ぞと思ふ人はなし、
 彼所が麓の學文路宿、
 母親案じ給はんと、

遙か向ふを見渡せば、
 左に花樋右に珠數、
 石童丸は上り坂、
 見上げ見下す顔と顔、
 苧萱僧の御衣と、
 其時石童苧萱の、
 此御山に吾父の、
 云はれて苧萱聞よりも、
 鞆は栗色消し叩き、
 下緒は黒の一つ打、

苧萱道心重氏は、
 光明眞言唱へつゝ、
 互に親とも吾が子ども、
 忽ち吹き來る山風に、
 縫れ合ふたる恩愛に、
 法衣の袖に取り縫り、
 今道心とぞなり給ふ、
 見れば幼き一人旅、
 鏝は鍍金の金吹雪、
 中身は何か知らねども、

其日は大師の花の役、
 御山を下らせ給ふとき、
 知らねど傍へ立寄りて、
 石童丸の振り袖と、
 親子の縁ぞ知られける、
 申上ます御坊様、
 御存じあらば教へてと、
 腰に差したる小脇差、
 目抜きは孔雀の一つ羽、
 某加藤を名乗る時、

拜領なせし小脇差、
心を鬼に取り直し、
五年剃つたも今道心、
四方の出口に札を立て、
又逢ふ時も廻り來ん、
御身の訊ぬる人あらば、
あはれ御慈悲に其札を、
今は途中の事なれば、
其札書きて進せんご、
草の庵に連れかへり、

扱は吾が子と思しが、
石童丸に打ち向ひ、
昨日剃つたも今道心、
國と所の名を記し、
遙かに見ゆる彼の森は、
夫を證據に逢はれよご、
書き給われご曰ひつれば、
矢立も持たず筆もなし、
聞きて石童喜びつ、
草鞋を解がせ上にあげ、

煩惱爰に起りしご、
此御山の定めには、
そは中々の事ならず、
捜せば訊ぬる其人に、
彼れは御山の札立場、
聞きて石童涙ぐみ、
頼むを聞きて苺萱は、
吾が住む庵に來りなば、
苺萱僧は手を取りて、
硯取り出し筆を取り、

國は何處で名は何んご、
探題守護を司ごる、
名乗れば苺萱驚きつ、
石童それと見るよりも、
早く名乗りて給はれご、
云はんとせしが待て暫し、
吾は父にはあらねごも、
仲睦じく暮せしが、
空しくなりし不憫さよ、
聞きて石童驚きつ、

問はせ給へば石童は、
加藤左衛門重氏の、
持たたる筆を取り落し、
嘆かせ給ふは不思議なり、
云はれて涙隠しつ、
御山の掟は破られず、
其苺萱と申せしは、
去年の秋の末の頃、
海山越へてはるくご、
わツごばかりに泣沈み、

國は筑前松浦の、
忘れ片身の石童ご、
暫し涙に暮れけるが、
父上なれば片時も、
扱は吾子か懐しや、
堰き來る涙押止め、
吾が兄弟の如くして、
悪ひ病に取りつかれ、
尋ね來りし甲斐もなし、
漸く涙押し止め、

それは誠か御僧様、
 定めし墓も有るならん、
 教へ給へと頼むなり、
 願へば苧萱静々と、
 其頃立てし新らしき、
 石碑の前に連れ行きて、
 果敢なくなりし標墓ぞと、
 聞きていよく悲さの、
 中より取り出す麻衣、
 姉上様が父上に、
 持つて来りし甲斐もなし、
 後ろに立ちし苧萱は、
 胸に應へて目に涙、
 忍び兼ねたる風情にて、
 海山越えて来りしに、
 空しくなりし哀れさよ、
 さは云ひ乍ら是非もなし、
 涙は佛の爲ならず、
 母上様に此譯を、
 話して回向なし給へ、

あはれ御慈悲に其墓を、
 涙乍らに立ち上り、
 之が其許の父上の、
 脊中に負し風呂敷の、
 逢ふ事あらば進せよと、
 始終の様子を聞き、
 如何に御稚兒よ聞き給へ、
 名残惜しきは道理なり、
 一度は麓に下り行き、
 これは御山の御供物、

母上様へ土産ぞと、
 苧萱僧に打ち向ひ、
 憐れなるかな母上は、
 石童それと露知らず、
 奥の一室に這入り行き、
 言へ共呼べども答へなし、
 總身共に冷る渡る、
 前後も知らず泣き沈む、
 野邊の送りも整へて、
 天にも地にも便りなき、

云はれて石童力なく、
 厚き御禮を申し述べ、
 石童かへらぬ其中に、
 玉屋が茶屋に歸り来て、
 母上様よ石童が、
 これは不思議と立寄りて、
 石童見るより驚きつ、
 助け給へよ觀世音、
 片身に遣る白骨を、
 父上様には生別れ、

涙ながらに立ち上り、
 押し戴きて下りける、
 空しくなりし果敢なさよ、
 草鞋を脱いで足そゞぎ、
 只今歸り来たりしと、
 様子を見ればこは如何に、
 思はずわつと聲を上げ、
 暫らく涙押し止め、
 涙ながらに拾ひ上げ、
 母上様には死別れ、

心細くも只一人、
 姉上様に語らんと、
 丁度其日は四十九日、
 一度ならず二度ならず、
 世の習ひとは言ひながら、
 如何に我身をせんぞ、
 石童丸の思ふには、
 頼り行くより他はなし、
 漸く爰に蒞萱の、
 何卒御弟子になし玉へ、
 便りになるは姉ばかり、
 歸つて見れば姉上も、
 法事の最中ならんとは、
 姉上かけて三度まで、
 斯る憂目に逢ひ玉ふ、
 天には仰ぎ地には俯し、
 高野に登りし其時に、
 又も高野に登り行く、
 柴の庵に尋ね着き、
 いはれて蒞萱是非もなく、
 早く歸りて此由を、
 無情の風に誘はれて、
 憐れなるかな石童は、
 死別れとは如何ばかり、
 最早頼るべき人もなし、
 嘆く心の哀れさよ、
 憐み給ひし御僧をば、
 心の中を憐れなる、
 助けて玉へ御僧様、
 遂に御弟子となし玉ふ、

それより高野を立ち出、
 此處に住居を定められ、
 親子と名乗り給はねど、
 今日も昔しの物語り、
 音に名高き石童寺、
 紀州を始め國々を、
 師匠よ弟子よと名乗のみ、
 親も地藏の化身にて、
 信濃の國に隠れなき、
 親子地藏と残りけり。(おはり)
 廻りくつて信濃まで、
 命の終りに至るまで、
 子も又地藏の化身なり、
 川中島の善光寺、

○石童丸略譜(は調二拍子)

3	4	6	6	6	6	6	7	6	4	6	6	0	3	3	4	6	6	7	6	4	4	4	3	2	0
つき	に	一	む	ら	く	も	は	な	に	か	ぜ	ち	り	て	は	か	な	き	よ	の	な	ら	ひ		
2	2	3	4	4	4	3	4	3	2	2	7	0	2	2	7	5	6	7	2	3	3	3	3	3	0
ち	く	せ	ん	ち	ー	く	こ	ひ	せ	ん	ひ	こ	お	ー	す	か	まつ	まで	る	く	か	こ	く		

〔一三〕 民謡

(一) 民謡とは何か

民謡とは一般人民に歌はれる謡と云ふことなり。されば流行歌はいふに及ばず
子守唱も都々一も皆これなり。又端歌の短いものは民謡として取扱はれてゐるも
あり、本章には最も趣味深き二三の小唄を掲げて其一端を示す。

(二) 趣味の小唄

(1) 石塙鳩唄。□めでたくの若松さまよ、枝も榮わる葉もしげる□家のお背戸に
や茗荷や露や、冥加めでたや富貴繁昌□今年や豊年穂に穂が咲いて、道の小草に
や米が生る□コレが此家の大黒柱、ついて納めて末繁昌□なんぼ隠いてもおちよ

が臍出臍、へそが出臍で戻された□臍とお尻戸とごちらがよかる、臍とおへこの
間がよい。

(2) 安來節。▲めでた〜が三つ重なりて、鶴が御門にや巢をかけた▲さした盃中
見てあがれ中は鶴龜五葉の松▲呑めよ騒げよ一寸先き暗よ、今朝も拭きて下戸が
来た▲十神山から春風吹けば、安來千軒花ふいき▲お國戀しやあの燈は關か、關
は名所よ五本松▲ぬしを思ひ葉八重垣さまの、めうと椿の千代かけて▲松江大橋
流りよがまよよ、和田見通ひは舟でする▲破れぞうりも組末にやならぬ、お米育
てた親じやもの▲親の意見と茄子の花は、千に一つもあだがない▲嫁が〜と嫁
譏りやんな、譏る我が子も人の嫁。
(3) 琉球節。●琉球と鹿兒島にや竿さしやと〜、なせにと〜かぬ我思●琉球にお

出るなら草鞋はいておじやれ、琉球は石原こひし原●鹿兒島こぎだす百里ほど、
 沖に見ゆるは琉球の、鹽屋の障子がちらくくと●沖の暗いのに白帆がみゆる、あ
 れは紀の國みかん舟●遠く隔て、逢いたい時は、月が鏡になればよい●夢になり
 とも會はせてたもれ、夢に浮名はたちやせまい●咲くが花かよ咲かぬが花か、咲
 かぬ蕾のうちが花●可愛女の願かけるのは、神や佛も可笑しかろ●吹けよ松風舉
 れよ簾●今の小唄の主見たや。

(4) 鶯唄 ●糸を取るなら斑なく細く、可愛男の夏羽積●立てば芍薬座れば牡丹、
 歩む姿は百合の花●好いた水仙すかれた柳、心石竹氣は紅葉●面見なされ十五や
 六で、一人夜道が通わりよか●獨り夜道が通われりやこそ、腹に三月の子がやど
 る●様の來る夜は宵からわかる、土堤の蛙がくるくと●様のこぬ夜は宵からわ

かる土堤の狐がこんくと●來いといふたとて行かれうか佐度へ、佐度は四十五
 里波の上●波の上でも御座れなら行かうよ、舟にや艫もある櫂もある●來るか
 くと濱にでて見れば、濱の松風音ばかり。

(5) 麥かち唄 ●揃たくよ役者がそろた、麥の出穂より能う揃た●九尺二間に過
 ぎたる者は、紅のついたる火吹竹(頼山陽)●何をくよ川端柳、水の流を見て
 暮す(高杉晋作)●加賀の白山名は高けれど、雪はふりやせぬ六月に●信州信濃の
 新蕎麥よりも、私しやお前のそばがよい●麥の緑や菜の花かげに、つゞく四國の
 願禮笠●戀にこがれて鳴く蟬よりも、なかぬ螢が身をこがす●君と別れて松原行
 けば松の露やら涙やら●をんなくと輕蔑するな、五尺男は誰が生む●山を通れ
 ば蕪薇が止める、いばら離しやれ日がくれる。

(6.) 盆踊り唱歌。●うたひますのもおはもじさまよ、谷間したてのやぶ音頭●踊る
 氣違ひ見る阿呆、いんで寝るもの病持●なんのこしやくな達磨でさへも、ひとり
 ねぬとて起上る●越前永平寺の風月さへも、浮世を捨て、盆踊●盆の月様圓こう
 て圓て、圓て圓こうて角がない●松にそうたる月さへなげにや、つゆもくらは
 せぬものを●盆の牡丹餅三日置きや儲る、お婆見やしやれ毛がはれた●迷た／＼
 よ姿にや迷た、わしも音頭にちよとまよた●赤い湯巻に迷はぬものは、木佛金佛
 石佛

(7.) 唐日挽唄。●白をひく時や眼り目でひきやる、團子食ふ時や猿眼●秋の山には
 鹿さへ鳴くに、主の心は色すかぬ●思案仕所分別所、親の意見もき、所(但馬の
 古謡)●孝といふ字を分析すれば、老をいたく子でござる●戀といふ字を解剖

すれば、いとしくと言ふ心●戀で九つ情で七つ、合せ十六の妻ほしや●ないて
 呉るな可愛の軍馬よ、今宵忍は戀ぢやない(乃木希典)●儘よ三度笠よこちよにか
 ぶり、旅は道連れ世はなさけ●木挽さんかよ恥かしゆござる、わしが殿御もこび
 きさん●わたしや歌すき念佛ざらひ、死出の山路も歌で越す。

第四編 技 術

(二) 擊 劍

擊劍は劍術とも謂ふ。人を斬る術なり。稽古するには昔時は木刀を用ゐ、今は竹刀を用ゆ。試合ふに体の構へ、双方の距離、禮を爲し合ふ等は柔術に異ならず先づ刀の構へ方を知るべきなり。

(一) 刀の構へ方。これには五通りあり。即ち大上段、上段、中段(水月、青眼は此の中の一構へなり)下段、八相、是れなり。

1. 大上段の構へ方は、足を外八字に踏み、右の手にて鑢際を持ち、左の手に柄

頭を持ち、切先を稍上りめに高く頭の上へ上げて撃下ろすなり。

2. 上段の構へ方は、左の足を前方へ出し、右の足を後に退き、體を少しく反らし切先上りに、左右何れにても頭邊へ上げて撃下ろすなり。されば右邊へ上ぐるを右 上段と曰ひ、左邊へ上ぐるを左 上段と曰ふ。

3. 中段の構へ方は、足を少し外八字に踏み、少し反身に爲り、刀を向ふ上りに持ちて構ふるなり。是れは撃方に非ず。受刀の構へにて撃つ意を含めるなり。依て、水月又は青眼は、敵手の肩間の間へ狙ひを着けて惱ますなり。

4. 下段の構へ方は、中段の構へと同じ足つきにて、切先を一段下ろすなり。是れ亦受方にて撃つ意を含む構へ方なり。

5. 八相の構へ方は、切先上りに左右何れにても横に出し、敵手を横薙に斬拂ふ構

へ方なり、右八相の構へは。左の足を前へ出し、右の足を後ろにし、左八相はこれに反するなり。

(二) 試合。これは千變萬化にて、形を述べ難けれども、先づ双方六尺開きて對合ひ六寸まで近よりて禮し、禮終れば双方蹲り、左の手にて刀の鐔下を持ち、右の手を右の膝頭に置き、双方立ちて各々左の手にて鐔下を持ち、足を外八字に踏み、右の足を出だすと同時に試合を始むるなり。

(三) 掛聲。此の意は、柔術に異ならず。

(四) 勝負。敗けたる者は、必ず參つたと聲かくるなり。但し、勝負付かざれば双方刀を投げ捨て、大手を擴げて組み、假面を脱されたる者を敗とするなり。

(二) 柔術

柔術は六藝の母と云ひて、武技たる弓、馬、劍、槍、銃、砲の六科を生ずる基本なり。何となれば六藝何れにても、柔術の素養なければ熟達せざればなり。

(一) 柔術の意義。柔術と名づけしは、讀んで字の如く柔かに取るべき術なるが故なり、此の術の妙處は、自ら身体を柔かにして自力を主とせず。敵手の入れたる力にて敵手を負かすなり。柔以て剛を制す。

(二) 柔術を用ゐる心得。我が技倆を見せんとて、戯れにも用ゐるは宜しからず。危急存亡、正當防衛の爲めならでは用ゐること此れ第一の心がけなり。

(三) 柔術を修めて益ある事。これを知れば、勝負に使はずとも、左の三益あり。

1. 万事決断力にとむ。2. 無形の護身と爲る。3. 稽古練修するは運動となる。

(四) 柔術の諸科。科名は左の如し。

坐取、立合、中段、要門、坐要門、離れ形、柄捌、無刀取、居合等

(五) 柔術の通語。これは種々あり。左の如し。

片手にて敵手の胸襟を掴み持つを片胸取と曰ひ、兩手にてするを兩胸取と曰ふ。

一試合の事を一本と曰ふ。取り合ふ一人を使手と曰ひ、其の敵手を受手、又は單に受とも曰ふ。

以上は名詞にて、動詞にては、打つ、受る、取る、外す、切る、拂ふ、押す、引く、上る、下す、掛る、投る、伏る、倒す、突く、折る、絞る、中る、引廻す、蹴込む。

取る所の要所。これは胸、衣紋、腕首、二つ腕。(胸は胸の襟、衣紋は後ろ襟)

打つ所の要所。これは眉間(眉と目と眉と目との間なり)。

掛くる所の要所。これは取伏せて引倒す前に、坐するは膝、立つは足を掛く。

突く所の要所。これは咽喉、睪丸。(中る所の要所)これは肋三枚、睪丸。

絞むる所の要所。これも右同様。(蹴る所の要所)これは睪丸。

胡坐。これは通常の胡坐に非ず。居合腰に爲りて居る胡坐なり。

立取足の踏み方。これは足を外八文字に踏むなり。

拳の心得。禮畢りて取り始むるときには、手先を握拳にし、拇指を必ず内に握込

み居るは定まりなり。何となれば、拇指を敵手より折らるゝ恐ある故なり。

體の危険部豫防すべき事。危険部は前に記せし要所にて、睪丸、盾間、咽喉、肋

三枚、膝、足なり。何れも用心す。拳丸は蹴込まれ、眉間は打たれ、咽喉は締められ、肋は當てらる、何れも急處なればなり

(六)掛聲の事。取かゝるにも、引倒すにも、總て氣合を入るときは、掛聲を掛くるなり。これはヤアと掛け、ウンと止めるなり。ヤアウンは開闔にて、開きて闔る意あるなり。故に開と言ひてより闔と言ふまでは、氣合斷れざるを要す。

(柔術の流派)古來有名にて多く行はるゝは關口流にて。高尚なるは起倒流なり。尙ほ此の他に流派多し。近來嘉納流起る。これを改良派とす。

(七)柔術取方の名稱。坐取、立合等の分科名は前に記したれども、然なくして取方の模様に依りて名つけたるものは左の種々なり。

1. 坐取にては、片胸取。兩胸取。右脇返し。左脇返し。羽返し。右取返し。左取

返し。屏風返し。表脇打横引。裏脇打横引。

2. 立合にては、左右行違ひ。向ふ車。肘車。衣被ぎ。非人取。諸手返し。

3. 中段にては、表裏の雲劍。花筏。睡月。千鳥。

4. 離れ形にては、表裏の屏風返し。霞取。絞倒し。喉がらみ。

5. 要門、坐要門にも。それく名あり。

6. 柄搦にては、柄落し。柄倒し。鑑返し。鑑止。打込。

7. 無刀取にては、かけ橋。花の影。雲隠れ。出合搦み。友千鳥。

右の他。簡易の取り方にては、又左の種々あり。
ステッキ投。腕がらみ。かなめ責。鬼こぶし。引おとし。友車。下り藤。後ろ取。小手返し。氣取。背負投。撞木。刈捨。大殺し。天狗勝。兩手取。壁添。腰霞。捨身。

〔三〕 馬 術

馬術は馬に乗る術なり。是れ亦武藝六科の一にて、流儀は種々あれども、大坪流大に行はる。此の本流の乗方は、五十二ヶ條ありて、其餘に十六ヶ條あり尙ほ其の上に、別に十二ヶ條あり。手網捌にも種々法あり。されど今は、陸軍にては西洋の術を用ゐらる。

修業の進路を概擧すれば、左の如し。

馬學の部にては、馬の骨骼。馬の性質。馬の外貌。其の名稱。乗馬鑑定法。蹄鐵馬の毛色。馬の年齢鑑定。使用年限。衛生。飼養法。歩法あり。馬具裝置法及び乗馬法の部に於ては、轡の銜ませ方。鞍の置き方。鏡の適度。馬

の牽引法。飛下り飛上り。乗馬姿勢。馬上進退柔軟法。扶助騎坐。拳の動作。拳と韁との關係。脚の用法。拍車。脚と拍車との關係。脚と拳との關係。諸扶助の一致。行進。駐立。回轉。右左向。退脚。速歩。短縮速歩。伸張速歩。駐立中より速歩。速歩より駐立及び常歩。前足旋回。後足旋回。横歩。駈歩。常歩より駈歩。速足より駈歩。駐立より駈歩。駈歩より速歩。駈歩より常歩。駈歩より駐立。短縮駈歩。伸張駈歩及び歩度。駈歩中手前變換。障碍飛越。難路通過。水馬術。乗馬素人手當法。病馬の容體等なり。

(一) 乗馬方法 稽古の初歩は、馬を識り、馬を愛し、馬を馴れしむるなり、此の事は誠に肝要なり。これを馴感と云ふ。少しく乗り慣るまでは、馬の頭を他の者に持たしめ、馬の左側に行き、鞍の上に懸けたる韁を、鬣と共に握り、馬の肩の處

にて背面向になり、左の足を鏡の中へ入れ、右の手にて鞍の後ろを持ち、右の足に機みを起し、真直に體を上げ、左鏡の上に立ち、體を少しく前に傾け、鞍の翻るを防ぎ、右の手を鞍の前へ移し、右の脚を高く軽く静にし、馬の背を越して鞍に跨り、右の足を右鏡の中へ入れ、騎坐を學ぶなり。

騎坐の重心を取りて安乗するなり。其の重心點は、兩坐骨と腎部との間なる會陰の所に据わ置くなり。騎坐定まれば、次は乘馬の姿勢を取るなり。

(二) 姿勢を取る心得。これは、左の諸件なり。

1. つとめて腰を前方に張り、上體を軟かく保つなり。硬固なるは可ならず。又、腰を後方に張るは、逆にて宜しからず。

2. 股を充分開き、膝蓋を前面に向はしむる様にし、膝は下げ、股と共に等しく鞍

に着け、之れにて騎坐を助くるなり。

3. 足は殆んど馬体と平行して踵を下げ、脚の動作に便利ならしむ。

4. 頭は真直にして、眼は前面を見、肩は後方に退き、兩腕は自然に垂れ、肘は軽く體に接し、上體は正直自由にし、主要なる平行を保つなり。

5. 拳は諸指の第二關節を對向せしむる如くにして内方に向け、小指を體に近づけ肘よりも稍低くするなり。

(三) 歩法。歩む直行進には、常歩、速歩、駈歩の三あり。此の三様の歩度は、馬によりて多少差違あれども、一分間の歩度は、常歩は、九十米突。速歩は、二百十米突。駈歩は、三百米突。

〔四〕弓術

弓術は、武藝六科の首に位せしものにして、古來武士を弓矢取る身と云ひ、我が神代の太古より傳はれり。

(場所) 矢を射る所を弓場と云ひ、的かける所を的場と云ふ。

(的の種類) 通常の直徑曲尺一尺二寸、大的直徑曲尺六尺、小的。

(射習ふ順序) 始めは卷藁桶を的にして射、稍熟達したらば本的に移る。

(矢取籠) これは細長き籠にて、矢を取上ぐるに用ゐるなり。

(弓懸) これは張弓のまゝ擡する具なり。これに三挺懸、四挺懸あり。

(射所よりの場迄の距離) 此の距離は、何間何尺と言はず。張りたる弓を十五回

回轉したる總長さを距離とするは定法なり。されど追々技進まば、其の熟練するに従ひて、三十間にも五十間にもするなり。

(的の用法) 射始めは通常のを用ゐ熟練したれば大的を用ひ、小的は狙ひ射に用ゐ、銀小的は射難き處に懸け用ゐ、金小的は一層得難き處に懸け用ゐるなり。

(矢の一手二手) 矢は一條にて數へず。二條を一手とし四條を二手とす、此の他

三手は六條なれば幾手にても推して知るべし。故に二手を四條矢と謂ふ。

(弓張る注意) 弓の跳返りに撃たるれば死に致さるゝことあり。故に、弓を張るときは、其の下に人を置くべからず。又居るべからざることなり。

(弦かけの寸法) 弦を弓へ引かくる寸法を曲尺にて五寸にするは定法なり。

(卷藁射前の事) 稽古はじめの卷藁射前だけを一通り述べし。左の手にて弓を

向ふ下りにし、弦を上にし、斜ひに持ち、右の手にて一手の矢を、矢筈を後ろ上りにして、鏃を上より覆ひて逆手に持ち、體を堅めて静々と立ち出で、射込桶に對ひ兩足を一所へ集め更に外八文字に踏み、弓を左脇より右脇へ廻はし、右の手は矢を持ちたるまゝ、同じ手つきにて跪き、弓を左の手にて前下りに左へ廻して持ち、右の手は前の如くに矢を持ち、立ちて弓を左の手にて前下りに左へ廻して持ち、右の手には前の如く矢を持ち、左の足を向ふへ出し、右の足を少し引き、兩足を擴げて立ち、坐して弓を立て、矢一手を右の手の拇指と食指とにて支へ持ち左の手に持ちたる弓を、クルリと翻して右へ廻し、弓を地に立て、右の手に一手の矢を持ちながら、中指と無名指と小指とにて鏃を持ち、矢筈を後ろ輪めになるやうに、食指と拇指とにて弓を持ち、左の手を懐ろへ入れ、其の片手にて左の片

肌を脱ぎ左の手にて弓を持ち右の手にて一手の矢を持ち、弓を前方へ傾けて持ち矢筈上りに矢を持ち、左膝に力を入れ、右の手に持ちたる一手の矢の内一本を早矢として左の手に移し、弓を持ちながら其の早矢を、食指と拇指とにて、矢筈の下際を少し鏃下りにして弦に嵌め、それを斜めに持ち、乙矢を前のやうに右の手に持ち、足を左右に抜き、左膝の所に弓弭の下を當て、的を見、乙矢を持ちたる右の手にて弓に番へたる早矢の矢筈を持ち、左の肩を下ろし、弓を持ち、其の手の小指に力を入れて右の肩まで引き入れ、伸び入り、射放し、乙箭も射放し、是れにて一手射終るなり。斯くして續々射、全く射終りたらば、徐かに坐し一體して退く。

〔五〕銃 獵

銃獵に二種あり、娛樂的なるを遊獵といひ、然らざるを職獵といふ。何れも雉子山鳥待屋討、飛討、揚鳥討、鳧雁鴻白鳥討、海濱討、水鳥船討、田鶴討、兎討、狐狩、猪鹿狩等の區別あり。銃には前裝銃、火繩銃、後裝銃、二連銃、三連銃、六連銃、單身銃、村田銃、杖銃等ありて、一發射に用ふる散彈の分量によりて番號を定む。即ち一斤(百二十粒)を十二分して用ふるを十二番銃といひ、二十分して用ふるを二十番と云ふ。獵犬は通例、雉兎を討つに最良と評せらるゝ普及の種類はポインター及びセッターの二種にて、搜索且つ死鳥等をくわへ來らしむるはスパニール犬を最良とす。又猪鹿狩にはクレーハウントを可とす。服装は十分緩

やかに裁ちたる羅紗服を良しとす、色は枯葉色又は土色を可とす、外套はカツパ式便利なるべく、帽は茶羅紗にて、時に頭より耳まで包み得るやう仕立てたるが宜しく、履物は洋式の獵靴を普通とするが、併し我邦の如く池沼多き處にては草鞋を用ふるも亦極めて便利なり。獵囊、銃袋、脚絆はツツク若しくは木綿織を用ふべし。遊獵職獵を問はず、銃獵には狩獵法其他諸規則あり、必得べきは云ふまでもなし。

◎備考

武術六藝中、銃砲術及銃槍術の二科は兵法上必要なるも簡單に説き難し、軍師につきて慎重の研究あらん事を熱望す。

〔六〕 水 泳 術

水泳術を修業するは、獨習にては危険ゆる、必ず師に就き、其の監視保護を有して稽古すべきことなり。師より教示すべけれども、豫め左に記すべし。

(一) 入水の忌時。先づ水中に入りては悪しき時を知るべし。即ち空腹なる時、食時、疲勞したる時、早朝、惡寒ある時、頭痛する時、汗のまゝなる時。

(二) 水の模様。水の模様を見ずに泳ぐは危険なり。河ならば水の輕重によりて壓力の強弱を知り、海ならば水捌きを爲し、流れの變化、水勢の如何、廻り潮を見て安んじて泳ぐべし。

(三) 水中に入る心得。此のときには必ず六尺の堅たき禪をかきて入るべし。是れ翠丸の害を豫防する爲めなり。シャツをも着るも可なり。而して必ず口中を嗽ぎ身体を清め、充分に空気を吸ひ込み、力を下腹に込めるべし。斯く敬して、決して易き事とし侮るべからず。

(四) 腹泳。初めは水中にて兩手を胸の前に置き、兩手各々指と指とを離れぬやうに密着し、掌を凹め、肘を下へ曲ぐる氣味にし、膝にて足を揃へて密着し、踵を外へ向け、膝下なる脚と脚との間を成べく開け、手は充分前へ出し、其の手を大腰まで返し、水を拂ひては前へ出し、右が終れば左の手を其の様にし、互ひちがひに斯くする度に、足にて水を蹴り、手と足と互ひに働かすなり。

(五) 背泳。此の泳ぎは、游泳中に疲れたるとき、休むに用ゆ。これは靜に仰向にな

り、身体を真直に伸ばし、首も腰も曲げずに、頭の後部も水中に入れ、顔と胸と
 兩足の指とを水面に出し、掌を仰向けて斜めに下方を衝き、而して水を壓すなり
 斯くすれば浮居ものなり。これは長時間に亘るは悪し。何となれば眼が他に及
 ばず、他の物の衝突を恐るればなり。

(六)足泳。身体を立て、足にて泳ぐ故に立泳とも云ふ。これは深く熟練したる者な
 らざれば泳ぐことを得ず。大に物理に依る泳ぎ方にて、兩手を叉み、身体を收束
 して全体の重點を一處に集め、平均を取り、手を少しも動かさずして、足のみに
 て泳ぐなり。斯くして歩行するが如くする故に、歩泳とも云ふなり。

(七)潜泳。これを俗に水入と云ふ。此の始めは、手を前へ出して水を切り足にて少
 しく水を突き、首を下方に斜めに向けて沈むなり。されど最も深き水中へ沈むは
 首をば足より下にし、體を斜めにして沈むべきなり。

(七) 催眠術

(一)催眠術の起因。此の術の現象は、上古より亞非利加洲の埃及にて、古今通じて
 四千年間此の術を行ひ來りたる一宗派あり。其の施術の方法は、白色の陶器皿の
 中央に、ペンを用ひて色汁にて、二個の三角形を交叉に書き、其の三角形の中へ
 一圓に、或る秘密の意味を含みたる語を記し、別に又皿に油を注ぎ、一層光澤を
 増し置き、斯くて少年一人々々に數分間三角形の正中を見詰めしめ居れば、忽ち
 睡眠して、睡遊の有様に陥りたりとぞ。亞刺比亞等に於ても、如上に類似せし術
 を行ひし者あり。

然るに近時英國の外科醫、ジエームス、プレート氏あり。此の人は古來行ひ來り

し傳身鑷氣術の妄誕無稽なるを感じ、之れを看破せんと思ひて、西曆一千八百四十一年に其の研究に着手し、研究を重ねたる末、友人なる某氏に、小瓶の頭を熟視せしめて試みしに、三分間を経過せざるうちに、某氏は眼閉ぢ頬に涙傳はり、首を垂れ、嘆息しながら睡眠を催せり。プレート氏は是に於て此の術發見の緒に就き、更に其妻女に試み、家僕にも試みしに、成績頗る良好なりき。是れに依りて更に又、傳身鑷氣の種々の方法を、新たに發見したる方法に據りて試験せしに是れ亦悉く好結果を得たり。是に於て左の諸事を斷定せり。

傳身鑷氣的現象は神経系の錯亂より生ぜしめ、而して神經系錯亂は、視方を凝らし、全く身體を休め、注意を専らにするより起る結果なり。凡ての現象は、施術者の施術、又は意思より生ずるに非ず。傳身鑷氣的液体に依りて生ずるに非ず。

唯被術者の身體的及び精神的の境遇に依りて生ずるなり。

右の如く斷定し、尙ほ之れに由りて左の如く種々の理を發見せり。

催眠術より起りたる睡眠は、必しも常の睡眠に同じからず、幻夢の有様より深き昏睡に至るまで種々様々なり。或る場合には暫時睡るのみなれども、其の他の場合にては、意識を失ふまでも熱睡し、目覺めて、後は睡眠中のことを記憶せず、全く知覺を失ひしことを曉るのみなり。又一の場合には、其の筋の弛みし爲睡眠せしも、或る場合には之れに反し、呼吸は塞迫して、其の筋の張りし故に睡眠するも有り。同一人のみならず、甲者にも乙者にも、丙者にも更らしむるを得べく眠りを覺ますも亦同汗なり。

斯く理を發見せり。

(二) 睡眠に妨げある條件。左の如く種々條件あり。

喧ましき音響、食事相すみたる時。情の高ぶりたる時。強き光、濕りたる空氣。

室内熱きに過ぎ、若くば寒きに過ぎたる時。アルコール性の飲物、珈琲又は茶を

飲みたる時。

(三) 睡眠を助くる條件。此の條件は左の種々あり。

心中又は心外の静穩。同く朦朧。同く暗黒。しめやかなる音樂。花の香り。

(四) 施術すること能はざる者。通常の人には、睡眠を助くる條件あらば施術し易け

れども、癡癲又は白痴の者には施術すること能はず。

(五) 催眠術の秘法。此術を施すには、各人各異にて一様ならず。方法種々あれども

其内最も簡易なる方法と、醒覺方法とを示すべし。

(六) 最も簡易なる施術法。これは只だ被術者と施術者と、眼と眼と見詰め合ふのみ

なり。法は各々其の趣きを異にすれども、要するに被術者の身體諸器を感じ受く

るに慣れしむるなり。身體的の施術は視官、聽官、官味、觸官、嗅官に感ずる施

術中にて、視官、聽官、觸官等に感ずるもの最も激し。

1. 視官は日光、雷氣、雷光、石火などが眼を射る場合の如く、迅速激烈なる刺衝

に依りて感動せらるゝにあれども光輝ある物体を見つめたる場合等の如く、緩慢

微弱なる刺衝に依りて感動せらるゝを得。

2. 聽官は呼鈴の聞ゆる如く、又は展べたる鐵絲等を投じ、其の音不意に烈しく刺

衝することあれども、又、枕時計の針を刻むが如き音、或は夜中遠寺の鐘を聞く

如く緩く長くあるは、睡眠を助くると知る可し。

3. 觸官は、女子ならば卵巢等の如き知覺鋭敏なる諸點を速かに、且つ強く壓すことも刺衝せらるれども、柔かき按摩、溫度、鑷氣体などにも刺衝せらるる温氣は催眠的要因の一なることはベルグル氏の示す所にて、氏は被術者の頭の邊りに温かき金屬か、又は自己の温かき手を置きて術を施したり。
 4. 鯨尾は麝香、又はスミレ、ムスク等を用ゐて其の感覺を疲れしめ、斯くして睡眠せしめ得たりとぞ。
 5. 味官に就て試みたるは稀なれども、成功せざるものにあらず。
 6. 醒覺法。これには身體的と精神的との二様あり。
- 眼の上を吹き又は眼を開けて中を吹く法等は前者に屬し、「醒めよ」の一言を誠意に發して醒ます等は後者に屬す。

〔八〕 圍 碁

圍碁は今より殆んど四千年前ならんか、支那の堯帝の代に、其の子丹朱に王道の征討法を知らしめんとて創造せしを、其の後勝敗を争ふ具に變用せしとテふ。それを唐代に、吉備眞備留學生にて入唐し、歸朝の際に齋し歸り汎く傳はりしとぞ。此の戲を爲すを打つと云ふ。打つ方法は、先づ兩人相對して碁盤に向ひ、技の劣れる者は黒石を取り、優れる者は白石を取り同等の者ならば交互に黒を取る而して黒の方先づ石を置くなり。さて又技の劣れる者は、其の程度に依りて若干目を置く。石一個を一目と云ふ。或は二目置くも三目置くもあるなり。或は聖目（井目とも書く、九目）置くもあり。最も初心の者は、四隅の星の後方に、風鈴と

て尙ほ一目づゝ置くもあり。相闘ふに、目的地とするは碁盤面にて、成べく多くの目を占有するにありて、占有の多少は即ち勝敗の分るゝ所なり。占有の意義は相手の石の周囲を隙間なく圍みて之れを屠り、又他の空地を相手より早く占領し相手をして之を侵す事能はざらしめ、斯くて進行するに随ひ、黑白の碁石入亂れて、石々複雑なる衝突を生ず、此の場合の處分法は却、せき、などの名稱あり。最後に至れば、相手の占有せし目の中に、己れの取りたる碁石を入れて寒ぎ、殘れる目の多少を比較して勝敗を決するなり。

(一) 隅の定石。これは碁盤の隅に打つ定まりの石なり。

(二) 石立。碁を打つ石の立て方なり。

(三) 碁の手相。手相とは碁を打ち合ふ強さなり。名人と云ふは位九段なり。名人上

手の間の手合と云ふは位八段なり。上手と云ふは七段なり。以下の手相は何段と言はずして、いくつの手直りと言ふなり。然るに初段二段など言ふは、語言ひ易き故なりとぞ。

(四) 碁盤の目數。碁盤面の罫引は、畫數十九行十九列ありて、三百六十一畫あり。

石は其の十字を成したる交叉點に置く。石を盛るゝ蓋付の器を碁笥と云ふ。三百六十一畫は、一ケ年の日數に凡そ象どり、白は陽、黒は陰に象り、四隅は四季、井目の九點は天の井星に象ると曰へり。

(五) 碁盤の脚。の梘子形なるは、助言すべがらす、口無しとの意を諷す。

(六) 碁盤裏の缺陷。は助言者を刑に處し、盤を翻して斬首を載する爲なりと云ふ。

左斜、何れも一畫づゝ進退するを得るなり。

金將は、前後、左右、右斜、左斜に進むのみを得。斜に退くを得ざるなり。

銀將は、前進、左右斜の進退何れも一畫づゝ徒ることを得るなり。

桂馬は、前後何れも一畫を聞き、三畫目の左右何れの畫へも進むことを得。

香車は、前に遮る駒無くば思ふまゝ適宜に進み得るなり。されど、退くことを得ざるなり。故に槍の異名あり。

飛車は、遮る駒無くば、前後、左右、縦横に、適宜に幾畫にても進退横行するを得るなり。されど、斜行することを得ず。

角行は、遮る駒無くば、右斜、左斜、斜行に幾畫にても進退するを得。但し、前後、左右に行くを得ざるなり。

歩兵は、只一畫づゝ前進するを得るなり。

(三)成駒及び駒の成りたる符號。自己の使駒にて、王、玉將、金將を除くの外、敵の三畫内に進入すれば、駒の裏面を表へ返し、成駒と爲るを得るなり。而して成駒符號は左の如し。

飛車の成駒は逸

角行の成駒は王

銀將の成駒は金

桂馬の成駒は香車

香車の成駒は歩兵

歩兵の成駒はと

成駒各自の行路。此の行路は變じて左の如し。

飛車は、固有の行路を持續し、其の上に一畫斜行進退するを兼ね。

銀將は、金將の行路に變ず。

桂馬、香車、歩兵は何れも固有の行路を行くを得ず。更に金將の行路を行くを得

(四) 駒組大法。此の法は左の如し。

- 一、王は早く片付け固むるを専一とす。
- 一、王は角筋を用捨すべし。
- 一、王の脇は金を離すべからず。
- 一、金銀は歩の頭の上を見合すべし。金は進むこと早く退くこと遅し。
- 一、桂は猥りに飛ぶことを見合すべし。遅きときは勝。少し早きときは損となる。
- 一、香は一ト通りの駒なりと雖も、端の仕掛肝要なり。
- 一、るは手前にて遣ひ、流は敵地にて遣ふことよし。
- 一、端の歩は妄りに突くべからず。手後れになること多し。
- 一、歩二ツより大切にすべし。

- 一、飛と角との捨場大事なり。
 - 一、駒離れぬ様に上るべし。
 - 一、敵の歩切れを勘考すること専一なり。
 - 一、手前に歩打つこと大事なり。
 - 一、同手は三度迄を限りとす。
- 但し、三度に及ぶときには、仕掛の方より換ゆべし。
- 一、相手の持駒を何々と問ふことしばくすべし。
 - 一、駒を駢ぶるとき、貴人の方へ王を駢ぶると心得べし。故に駒には王將と玉將とを設けあるなり。
 - 一、持駒は直ぐに當る様、又は含みありて打つべし。

一、進んで其駒にて前を圍ひ、前を圍みては仕掛くること、駒組の大意上手の態なり。

一、總じて五筋目、或は端に手あること多し。

一、總じて勝つことを専らとすべからず。手前を全く守り、敗ざることを肝要とすべし。然るときは自ら勝に向ふべし。

一、駒組の定法は、双方宜き手を撰んでのことなり。敵定法を離れ仕掛くることありとも驚くべからず。必ず末に差間あるなり。

同一の技倆あれば、タイマとて對等にて指すなれど、技力差へば優れる者は駒數を減じて指し合ふなり。是れを駒落と云ふ。駒落には六枚落、四枚落、二枚落、手合飛、香落、飛落、角行落、左香落、平手四間、平手相掛等あり。

〔一〇〕 劍舞

劍舞は正氣を發するに資するものにて正義雄壯なる詩歌を吟誦し、其の吟聲に合せて劍を揮ひ舞ふなり。武士道鼓吹の益あるものと謂ふ可し。さて此の技の起原の歴史上に見わたるものは漢史にて、彼の鴻門の會に、楚の項羽の臣范滎が、人をして劍舞に托りて沛公劉邦を殺さんとせしを見る。我邦にて大に行はれしは安政の頃にて、當時江戸の舊幕大學たる昌平校の書生等が佩ぶる所の刀劍を抜き舞ひたり。吟ずる詩は多くは頼山陽の作なる兵兒謠、天草洋の詩等、勇壯慷慨的を用ゐたり。

(一) 吟詩劍舞の要義。第一詩歌の意義を識り、殊に作者の述懐の如きは、其の詩歌

を作りし時、如何なる境遇に在りて、如何なる心持なりしや否やと、其の心中を我れに體し、作者が國を憂ひて慷慨せしを能く察し、思ひ遣り、自ら其の人の當時を思ひ入るなり。斯くせざれば、何ほど巧みに舞ふとても、決して眞況に迫らず。例へば辭世の詩歌の如きは、今將に死せんとする心持あるべく、是れにも亦自ら屠腹せし者あり、或は病死せし者あり、或は刑死せし者あり、各其の意思を異にす。是れ皆それ〴〵心すべきなり。舞ふには刀禮を知らざるべからず。刀禮とは刀劍の取扱方法にて、置き方、置くべき位置等なり。又拭きて鬪し、斬入り斬込み、進退周旋すること等擊劔の法に據らざるべからず。藝人共の戯れとは大に異なり大上段、上段、中段、青眼、八相、下段等の手を用ふ。人馬を薙拂ふ況にて八相を用いるが如し。

(二) 詩の吟じ法。こむは種々あれども、多くは左の吟じ方を用ゆ。

鞭聲肅々、夜渡河、曉見、千兵大牙擁、遺恨十年、磨一劍流星、光底逸長蛇、右の如く四字、五字、五字。又、四字、五字、五字と切りて吟ずるなり。故に之れを四五五の吟じ法と謂ふ。之れを心得ざる者は、七言の詩は七字づゝ四切に吟ずるならむ。それは通常正しき吟じ方なれども、劍舞に限りては、此の吟じ方は能く舞ふに合ふなりとぞ。

(三) 舞ひ方。これも同じく鞭聲肅々にて一例を擧ぐべし

「鞭」にて直立し、体は右向にて面は正面に向き、右の手には扇子を豎に持ち、左の手は刀を抱へて手綱を持つ様にし「聲」にて左の足を出し、扇子を鞭に構へ、それを右後ろへ退き、但し肱の前を半圓形に引くなり。「肅」にて右の足を横に踏み

出し、「肅」にて左の足を直に踏み出し、「夜」にて下より七ふが如くに天を指さし同時に左の拵指を鏢の上より掛け、少し柄上りに持ち、「河」にて扇子を下ろして地を指さし、左の方なる柄の上へ持ち來り、右の足を後ろへ退き、扇子を同方向に斜めに密と引き、「曉」にて右の足を左の足の在る所へ寄せ、扇子を持ちたるまゝ右の手にて袴を持ち張り、左の手は鏢元を持ちて柄上りに矯め、「見る」にて扇子を取直し、頭の上へ上げて延び上り、前方を眺め「千兵の」にて扇子を下ろすと同時に勢ひよく前方を指さし「大牙を」にて右の足を踏み出し、左向になり扇子をボンと下打に擴げ、右の足を右斜に退き、右の手を伸べて擴げ、扇子を平らに内へ七ひ抱へ持ち、「擁すを」にて、扇子を閉むると同時に左の足の踵の所へ折込みて坐し、扇子を右の乳の處へ構へ、左の手を上にし右の手を下にして扇子を持

ち、左の足を方を入れて踏み出し、「遺恨十年」にて、右の手にて我が胸を打ち扇子の先にて左の掌を指さし十年をば屈指して數ふる況を爲し、「一劍」にて扇子を後ろへ投捨て、左の手を刀の鯉口へ掛け、右の手を柄へ掛け、右の足を出して刀を前へ抜き、「磨く」にて右の手と右の足を退き、腹を張りて刀を研ぐ況を爲す。但し研ぎ方は右の方へ引上げ、又突出し、一、二と以上二回磨ぐ況を爲すなり。それより「流星」にて、刀を右の方へ引き上げ、又左へ引き上げ、左の手にて刀の背を押して矯の「光底」にて、刀を右へ斜めに引き、眼は前方を見詰め「長蛇を」にて刀を振かぶり、斬込み「逸す」にて刀の柄頭を右の股に附け、左の手を徐ろに頭上へ上げ、遠景を望む況を爲して舞了るなり。

〔一一〕 琵琶

琵琶は支那より傳來したるものにて、國史に據るに、仁明天皇の承和五年、從五位上掃部頭藤原朝臣貞敏入唐して琵琶の妙典を傳へ、譜數十卷と紫檀紫藤の琵琶各一面を得、歸朝して朝廷に奉り。是れより後本朝に行はれ、蟬丸、博雅の三位等堪能と聞ゆ、其の後平家琵琶なるもの出づ、即ち平家物語を歌ひて弾きしなり。今行はるゝ所の薩摩琵琶は、此の變種にして、筑前琵琶は薩摩琵琶より出でたる一派なり。歌に於ては異ならざれども、彈調に剛柔の別あり。薩摩琵琶は男子に用ゐられ、筑前琵琶は多くは女子に用ゐらる。剛柔其の好みに任ずること素より然かあるべし。薩摩琵琶の起りしは、鎌倉時代前にあるが如し。島津氏の

祖忠久、琵琶法師を使ひて武功を泰せしめしこと古書に見ゆ。舊薩藩士の文弱に流るゝ風無かりしは、琵琶曲興りて力ありしなり。琵琶の四絃は、春夏秋冬の四季に象り、撥の廣がりたるは風に配し、音律の妙なるは四時の順行して亂れざるに比すとぞ。

(一) 彈調。には、地音、大カン、中カン、謠ひ切り、吟がわり、崩れ、等あり。音律は高雅優麗にして悲壯凜烈なれば、克く鬼物をして泣かしむ。

(二) 歌章。歌は原と、今を距ること三百餘年の前、天正年中に島津家中與の祖たる貴久の生父、相摸入道日新公と稱せし人、當時士風の萎靡して振はざるを嘆じ、之れが振興の策を講じ、自ら歌曲を製し、琵琶に奏和せしめ、修文講武の傍ら、士をして諷ひ且つ彈せしめしに因す。故に多く忠孝義貞の事跡を基とし、聽者を

して感奮措かざらしむ。歌に古歌あり新歌あり。何れも端歌と段物とあり。短き端歌を高尙中の高尙とす。左に古歌の内端歌の一つを示す。

○春日野 (はうた)

春日野に、下萌ね出る若草の、歳の戸明けて秋津國、霞み渡れる片岡に、月は残りて雉子啼く、明けの友つる君が代を、壽き祝ふ初聲に、南山の、榮ね久しく松竹の、落葉かき取る諸人の、遊ぶ小川の菊の露、流れも匂ふ五百とせの、よはひを國にゆづる葉の、朝日かゝやく富士の峰、是を蓬萊山とは謠ひける。七寶の峰は、影を湖水に浸し、樹々の稍もあら磯の、月海上に浮びては、兎も走る波の上は、緑樹蔭沈んでは、魚木に登る風情かな、五風十雨の御代の春、四海も靡く時津風君が治むる御代なれば、幾萬代までと祈らぬものこそなかりけれ。

(一一一) 尺八

尺八は我が邦固有の樂品なり。これを吹くには十二の律呂に叶へる孔の開閉を知らざるべからず。笛の音孔は五個ありて、其内、左に五と記せしは裏孔なり。

(一) 十二律譜。十二律の譜音に充てたるは左の如し。
フ。ホ。ウ。エ。ヤ。イ。ヒ。タ。ラ。ル。レ。ロ。

圖にて示せば左の如し

●	●	●	●	五
●	●	●	●	四
○	●	●	●	三
○	○	●	●	二
○	○	○	●	一
エ	ウ	ホ	フ	
<hr/>				
○	○	○	●	五
○	○	○	○	四
●	●	○	○	三
○	●	●	●	二
●	●	●	●	一
メ	ヒ	イ	ヤ	
<hr/>				
●	●	●	●	五
●	●	●	●	四
●	●	○	○	三
●	○	○	○	二
○	○	○	○	一
ロ	レ	メ	ラ	

- (二) 尺八を吹く心得。即ち左の如し。
- 1、高音は、呼吸を強めて吹く。
 - 2、低音は呼吸を弱めて吹く。
 - 3、高音に吹くにも口を締めて吹く事あり。
 - 4、低高も口を締めて吹く事あり。
 - 5、ムツタリと繰りて揺る事あり。
 - 6、音を刻むことあり。
 - 7、短音を再び吹く事あり。之れを當りと云ふ。
 - 8、一拍子休止する事あり。
 - 9、連続することあり。
 - 10、拍子の二分一音を早く吹くことあり。
 - 11、一拍子音を引いて吹くことあり。
 - 12、一句の切にて呼吸する事あり。

〔一二三〕 篠 笛

篠笛は横笛より出でたるものにて、神樂には必ず用ゆ。此の笛は一、二、三、三半、四、四半、五、五半、六、七、八、九の十二本あり。即ち十二律具はりたるものにて、一より四半まで六律の音を具へ、五より九まで六呂の音を備へ此の十二本の笛を適用すれば、何にても吹奏するを得ざることを無し。

(一) 小孔の通名。篠笛には小孔七つあり。これは指にて抑へ、又、開くる爲めの孔なり。吹く孔は別に大孔にて一つあり。これを歌口と云ふ。さて吹くとき、右の端にある孔をひと云ひ、其の左を二、次を三、四、五、六、七と呼ぶ。

(二) 音の事。音には、筒音と、挫ぎ音とあり。又、敲く音もあり。筒音は、笛の筒

より出づる音を云ひ、挫ぎ音は、笛の吹き終りに、左右の指にて小孔を抑へ、挫ぐ如くに、ヒ、ヒー、ヒと出す音なり。

三) 天地人の姿勢。笛を吹くときの姿勢は、頭を正直にし、右の腕を上げ、左の腕は少し下げ、笛を平らにして高低なく一文字に持ち、頭を天とし、左の腕を地とし、右の腕を人とするなり。

四) 十二本一組の理由。篠笛は斯く一より始めて十二本あるに何故ぞと云ふに、これは天性聲音高き人、低き人、中位の人、それく、我が聲音の度に合ふ笛を用ゐるやうにしたるものなり。

五) 笛の長さ。一號が最も長くして、漸々短くなり、九號は最も短し。十二本なれども、前に言ひし如く、間に半の物三本ある故に九號止まりとなるなり。

〔一四〕 月 琴

月琴は、明清樂器中の一樂器なり。これと明笛、胡琴と三樂器を用ゐ、詩歌に合奏するなり。月琴は圓き桐製の胴故に満月形と視て月琴と名づく。絃は二絃づゝ上下に架く。太き絃より發する音は低音にて、細絃より發する音は高音なり。而して發音するには鼈甲製の義甲を用いて彈ず。

一月琴の韻譜。低音の韻譜は左の如し。

上 尺 工 六 五 合 凡 乙 四

高音の韻譜は左の如し。

仕 伏 仕 伏 仕 伏 仕 伏 仕 伏

(二) 彈奏法。これは正坐して月琴を軽く膝に上せ、左の手にて棹を握り、右の手に義甲を持ち蛇皮を強りたる胴頭より垂れて弾くなり。

(三) 雅曲の歌。明清樂の雅曲の歌の名は左の如きものなり。

韻頭。算命曲。九連環。抹梨花。剪々花。四季。紗窓。哈々調。月花集。久聞調。賣脚魚。鳳陽調。魚心調。平和調。等なり。

されど今は唱歌、軍歌、俗曲にて合せて弾くこと行はる。

(四) 曲譜音の發音。此の一例として、算命曲の發音を、左に記すべし。

上尺エ六エーエー、エー六エ上尺エーエ尺、尺六エエ上尺エ尺、四仕伏仕一合一四合一。此の括弧の内又一回返すなり

〔一五〕 風琴

風琴には二種あり。單に風琴と云ふは學校に備へある風琴のことにて、今一種手に持ち奏するものを手風琴と云ふ。樂譜は別に手風琴との異り無し。手風琴は樂器簡易にて、汎く多く行はるゝを以て、聊かそれを示すべし。手風琴は獨逸國人の發明せしものなり。携帶に便なる故に大に行はる。又、練習も容易なり。此の樂器は、十二の異音を有し、ストップの設け有りて、音の調和を自由ならしめ、面白き樂器なり、而して價も高からず。

(一) 音譜。此の器を取扱ひて奏曲するには、先づ音譜を知らざるべからず。音譜なるものは、其の曲の音の強弱、高低、調子の緩急等を精密に示したるものなり。

就ては風琴の鍵盤、鍵の番號の數字も知らざるべからず。されば先づ次に記す樂器面の説明を合點すべし



右に圖示せしは、一より十までの鍵を押し、輔を引伸ばし押縮めて發する二十異音の階名にて、○は輔を引伸ばし、●は押縮むることを示せしなり。

(二) 音符。これは音の長短緩急を示す符なり。これは、全音符、半音符、四分音符、八分音符、十二分音符、三十二分音符等を以て區別す。

一、全音符とは、時計の振子の四振の間、一イ二ウ三イ四オと數へ唱ふる間なり

されば半音符を二個合したる長さ緩さなりと知るべし。

(三) 拍子。拍子の意義は左の如し。

一、四拍子は、一イ、二ウ、三イ、四オと數へ唱ふるだけの間、連奏するなり。

二、三拍子は、四拍子の四分の三間、連奏するなり。

三、二拍子は、四拍子の二分の一間、連奏するなり。

附加音符。樂譜中の教字の右傍に●點あるは、左なる數字音符の一分一符號の價値を有するなり。之れを附加音符とす。

單縦線。樂譜の一拍子の一區毎を限る細線なり。これは音符は線間に配置して割合を示す。

複縦線。これは樂曲の終止を示すなり。形ちは||なり。

(四) 返復記號線。これは **||** 線にて始め、其の反形なる **||** 線にて終る。此の左右

二線の間の樂譜を繰返して奏することを示すなり。

返始記號。此の記號は **||** なり。復び繰返すことを示す。

終止記號。此の記號は、() なり。奏曲中、譜の中途にて終るを示す。

連合符。此の記號は、() なり。これを弧線と云ふ。音符幾つにても、要する丈

を繋ぐなり。音符を一拍子に、一音に奏するを示すなり。

半高音の符號。これは數字の左に **♯** を附するなり。半音だけ高くなるなり。

(五) 樂譜の一例として、唱歌の君が代譜を左に示す。

4	4	4	4	4	4
三三三三	四五三	四五五五	七六五五	四五五	四五三
きみかー	よーわー	ちよにー	やちよにー	るざれー	いしのー

左端に 4-4 と記しあるは四拍子のことなり。(4-2 は二拍子 4-3 は三拍子なり) 又數字の下に一線あるは、二分一時間に急速に奏するなり。されば若し、下に二線あらば四分一時にて、尙ほ早く短くなるなり。

四五五	四五三	五六七	六七五	四五三	四五三
いわほと	なうてー	こけのー	むーすー	せー	てー

(一六) 音 韻

〔一六〕喜劇

喜劇とは俗に俄と云ふ滑稽好笑を主とせる一種の遊伎にして、酒席又は祭日等に行ふ。京阪地方にては俄と云ひ、東京にては茶番と云ふ。芝居と同じく時代、世話に分れ、淨瑠璃より來るものを時代、時事の隙物を世話と呼べり。女形は主
 に大兵肥滿、滿面に塗りて一見笑を催さしめ、却て男役を綺麗にす。鬘は馬糞紙
 又は張子にて、鬘簪の類は抜挿自在一つ頭にて何役にても、鬘を取替へれば間
 に合ふやうに拵へあり。これは酒席の座興として、間に合せに起りしものなるを
 證すべく、其簡にして要を得る思ひ附中々に面白し。なほ幕毎に、終尾に結落即
 ち落語のおちと同様なることあり。これ俄の生命とする所なり。

〔一七〕福引

祝賀又は懇親會等の席上、銘々に鬮を引かせて物を分け與ふことにて、其法は
 物の名によせて、地口めきたる事を鬮にかきて引かすめ、かくて物品を與ふ。例
 へば「金時計一個」といふ鬮に當りたる人に將某の駒の金と桂各一個を與へ、「無
 官太夫」の鬮に密柑二つ（三かん二つで六かん）或は又かけ蕎麥（あつ盛）を與ふ
 る如く要するに人の意表に出で、滑稽を以て笑ひ興せしむるものなり。

〔一八〕 骨牌

骨牌とは小さき長方形の厚紙に種々の形象、符號、歌文句などを書きたるものにてトランプ、歌骨牌、いろは骨牌、花かるた等種々あり。其内最も多く行はるゝ花かるたに就て其概要を述べん。花かるたは一に花札とも云ふ。四十八枚を一組とし、これを四枚づゝ十二月に分ち、其月々の花卉を描き、尙ほ中には短冊を添へるもあり、又動物或は其他の景品を併せ描けるもありて、それ〴〵其等級を異にする。花合せ法の種類は八十八(略して八八と云ふ)、七短、素倒、與一兵衛、十五などであるが、最も興味あるは八々にて、花合せといへば直ちに八々を意味す。而かも金錢を賭することの盛んなるは苦々しき次第なり。

〔一九〕 家庭遊戯

凡そ身心の活動には、一定の規律ありて、何人にも一つの事に永く従事するときは、終に疲勞するを以て、適當の變化を興へざるべからず。精神の疲勞倦怠は身体の活動によりて大に恢復せらるものなり。遊戯は此の理に適ふものにて、常に精神を使役し、運動の機會少なき者には、殊に有益なり。

(一) 行進遊戯。これは一同の列を組み、足並を揃へて行進するものにして、簡單なるは一列、若くは二列にて、或は圓く巡り、或は渦を成し、或は波状を成して進み、復難なるものに至りては、或は前後左右に引退し、或は離れつ合ひつ入組みつして、足どりにも種々の仕方あり、音樂に合わせても行ふ。

(二) 競争遊戯。これに徒手競争と用器競争とあり。徒手競争は數人乃至數十人を横に一列に並べて、一定の地點まで早く着きたるを勝と定むるものと、また往復せしむるとあり。また場の周圍を何百ヤードと計りて一回乃至數回まはらしむるものあり。撰手競争は、三五人の優者を撰びて争はしむるなり。一人一脚といふは片跛にて競争せしむるあり、また兩足を縛りて跳ねて走らしむるもあり。二人三脚といふは、兩人一体となり、甲の右足と乙の左足を一つに縛り、即ち三脚となりて競争するなり。用具競争中最も普通なるは旗取にて、前方一定の距離に旗を立ておきこれを取りて歸らしむ、長距離ならば一本を取らしめ、短距離は數回往復して數本を取らしむ。これを盲目にて行ふを盲目競争といふその他尙ほ種々あれど略す。

(三) 數字入り歌。左の如し。

一、7。わ8。わ8。7。8。さげども8。まぶきの3。の1。つだになきぞか7。4。き。

(解) 七重八重はなはさげども山吹のみの一つだになきぞかなしき。

二、十ほ九七りちか九七る三の八萬千十り七九ねに四ほの三ち一をぞ四る。

(解) 遠くなり近くなるみの濱千鳥、鳴くねに潮の満干をぞ知る。

(四) 何處から數へても十五になる數字の列べ方。即ち左の如し。

2	7	6
9	5	1
4	3	8

上の並べ方を記憶するには、

これを一の歌として置けば忘れ難し。

『六一さんは八に刺されて七五三、二九四とも悪いと悪し』

〔二一〇〕 寫眞術

寫眞は、日光及び其の他の光りの作用に依り、景色及び物体を撮影する技術にて、其の起原は、今より凡そ三百餘年前、伊太利の「バプチスタ、ポルタ」なる者始めて庭の小高き處に一の暗室を建て、底部の中心に軸を設け、此の物を廻轉するやうにし、且一方の壁に小孔を穿ち、外部の景色を此の作用を以て一方の壁に映する様、即ち暗室を廻せば、種々の景色の現るゝが如く工夫せり。されど是れは只兒戲的一時の慰みにて、未だ景色を撮影すること能はざりしが、今より六十餘年前、佛國の學者「ダーゲル」と言ふ人、始めて金屬板の上に像を寫せり。斯くて其の後十餘年を経て、英國人「アーチャー」と云ふ人、更に硝子寫しの法を發明し

次で佛國人「トローペノ」は、又、コロデオン乾板法を始めたり。是れは前の濕板法（硝子寫）に比して頗る便利になりたり。其の後千八百七十八年に、英國人「マドック」は、魚膠乾板を發明せり。之れは從來の物に比して一層輕便なるものにて、今日行ふ寫眞種板は即ち是れなり。

（乾板の種類）。乾板は何にも使用するを得る一種の物とせず。室内撮影用。野外撮影用。瞬間寫用。幻燈映畫用等、使用向の異なるに依つて製造を異にし、此の品別は、包紙面に貼用する（レットアル）の色に依りて區別す。

（寫眞用器具）。種々なれども、先づ必要品は左の品々なり。
 暗箱、鏡玉、三脚、取枠、黒布、シボリ、暗室燈、皿、天秤、液量器、種板掛、燒枠等なり。

(撮影心得)。撮影を心得る順序は、左の如し。

乾板の見わけ方、乾板の取扱ひ方、乾板の一種オイルムの取扱ひ方、器具、景色撮影法、人物撮影法、光線的作用、夜間撮影法、暗室の構造法、

(現像法)。此の方法は、乾板に映じたる景色にても人物にても、其の像を薬品にて留め、種板に仕上ぐるなり。乾板を現像する順序は、乾板を取枠に入れたるまゝにて黒布に包み、暗室中にて、黄、橙、赤等の色硝子を通したる不感應光線の明りにて取出し、薬品を注ぎ、像を判明に現はすなり。

現像に用ゐる薬品は、一種ならず。數種あり。ハビドロキノン液、安母尼亞液など種々あれども、其の薬品中の稀酸鐵液、没食酸は必ず普通に用ゐるべき薬品なり。

現像液は、調合して貯へ置くべきものにて、第一號液、第二號液、第三號液までも製し置くなり。

現像の仕方は、乾板を現像液に浸し、板面に斑點の生ぜざるやう、器を揺り動かし、清水にて能く洗ひ、定着液の皿へ、板の薬面を上向けにして浸し置き、定着し終りたらば、尙も清水に浸し置き、尤も度々水を取かへ、取出して種板臺に掛け風すきの宜き清らかなる所へ持行き乾かすなり。

(ニス)を布く事。二回以上焼付くる爲めに存し置く原板は、必ずニスを布き置くなり。但し、幻燈又は透明畫の窓硝子板などの原板は、ニスを塗布するに及ばず「ニス」は、「ヴァハニス」とも「フルニス」とも云ふ。

(原板修整法)。これは原板の寫像を、好くなき部分を繕ひ直す手入れの仕方なり。

故らに繕ふにあらず、上りあしき部分を補足するなり。

(印畫焼付法)。印畫とは、原板の映像を紙面に印することにて、俗には焼付くると云ふ。用紙は鶏卵紙又は既製感光紙を用ゆ。畢竟は映像の散らざる爲めに紙面へ焼付け留むるなり。さて、原板は、薬面を上向けにして焼枠の中へ入れ、其上へ感光紙を載せて宛て、尙又其上へ適宜に洋紙を重ね、其の上へ蝶番ひにて聯結したる壓板を當て、彈き金具にて締め、引返して表面を日蔭の光線に曝すなり。されども原板映像の濃淡に依り、極めて濃きは直ちに日光に當て、淡きうちにも淡きは、日蔭のうちにも薄弱なる光線に曝すなり。取入の時間は一定せず。日和にも依る故程よき時に取入るゝなり。斯くして能く焼き上りたらば、印畫を一定の箱に入れ、蓋を爲し置き、悉皆焼け終りたらば鍍金するなり。

(印畫の鍍金法)。鍍金を、俗に色上と云ふ。鍍金するに、光線の強き所にて行へば感じて漸々淡黒色に變ずる恐れあり。故に暗室中か、又は光線の力の弱き所にて行ふなり。鍍金に用ゐる器具は、大なる皿、大なる水鉢等を要す。さて鍍金する印畫は、水を満たしたる器の中へ、一枚づゝ入れて浸し、取出しては他の器中の清水に移し入れ、斯く何回もして水を換へ、濁液の少しも出でざるまで行ひ、それより鍍金するなり。

鍍金液にも種々あり。鍍金するには、適當の液を用ゐ、液をバット平皿に入れ、洗ひたる印畫紙を一枚づゝ漸々に入れて浸し、斯くして鍍金完成し、麗はしき色になりたれば、大器に満たしたる清水中へ、順次に取出して入れ、能く水洗して定着液の中へ移すなり。

(印畫の定着法)。定着とは、最初焼付のとき、感光を起すが爲めに用ゐたる薬劑の残り、幾分か不用になりたるものを除去するなり。これにも定着液を要す。此の液の中へ、印畫紙の鍍金濟の物を一枚づゝ入れ、鍍金せしときも同様に、液を紙の隅々まで及ばせ、適度に渡し終りたらば、大器の清水中に移し入れ、二時間ばかり浸し置きて取出すなり。之れに用ゐる次亞硫酸曹達は、甚だしき劇藥故、之れを扱ひたらば、必ず手を洗ひ清むべしとぞ。

(印畫紙)。即ち左の如し。

- 1、プロマイド紙。
- 2、日光紙。
- 3、アトリス紙。
- 4、カーボン紙。

(轉寫法)。復寫のことなり。これに、單寫法と、複轉寫法とあり。

〔二二〕 玉 突

近來西洋より傳來せる遊技にて、二人相對して行ふ。即ち球突臺と稱する臺の上にて球を突き、その結果にそれ〴〵點數を設け、その點數を計算し、規定の點數を早く得たるものを勝とす。

(一) 球突臺。檜の如き堅き材にて作りたる臺にて、大き一定せず。通常は一丈一尺七寸五分、幅はこれより少し小なり。表面は平滑なる大理石にて作り、これを覆ふに綠色の羅紗を以てす。臺縁は彈力性の護膜を以て作り亦羅紗にて覆ふ。英國式のものには周圍に六つの囊を備ふ。(球象牙にて作り直徑凡一吋七分あり、勝負の種類によりて其數を異にす。四つ球突ならば白球二個(中一個に兩端に黒點

を附す)赤球二個(一は薄紅、他は濃紅)三つ球突ならば赤球一個、白球二個を用ふ(突棒)長さ四尺五寸乃至五尺、重さ百十匁乃至百五十匁あり先端に獸皮を附すこれを先革といふ。厚さ一分強、直徑三分強あり。この外點を數ふるために要する計數器あり。また棒架として、木製の先端に二三の凹ある小板を横着したるものあり。此は場合により球を突く時に突棒の枕にするに用ふなり。

二勝負の種類。四つ球つき、三つ球つき、ブル突、アメリカ四つ球、フランス三つ球等の種類あり。その突方には中心突、普通突、拗、逆拗、引き玉、押し玉縦突など稱するあり。我邦にて最も廣く行はるゝは四つ玉突なり。其法は四個の球を用ふ。まづ白球一個づゝを各自の持球とし、これを臺を縦に臺縁の中央より凡五寸許の所に置き、次に其前方五寸許の所に赤球を置く、對手も又反對の例に

同様に置く、さて其突始むるには、まづ自己の白球を以て敵の白球にあて、更に他の赤球に當つるなり。即ち自己の白球をつきて、例の臺縁に當て、それより向ふのコシンに反撥して更に敵の白球及び赤球に當つるなり。點數は通常六十三點或は百點とす。されども突手の巧拙によりて點數を増減するが故に必ずしも一定せず、而して白球と赤球とに當つれば二點、赤球二個に當つれば三點、白球と赤球二個都合三個に當つれば五點とす(規定)臺盤の外に球の飛出したるときは無効狙を定むる時、突く意なくして偶然に突きて球を動かし他の球に觸れしむる時は再び突くことを得ず。突棒にて一時に二個の球を推出す時は無効。持球を取違へて突きたる時も無効なりとす。

〔一二一〕 手品奇術

(人殺の奇術)。奸姪とか或は何々の意趣とかまたは親の敵とかいひて兩人争闘し終に其一人かなわじと遊まはるを引さらへて小刀を以て横腹を突き斬る。小刀の身腹の中へ這入事一二寸。サツト鮮血流れ出で其人大に苦しむ。然れども尙こなたはいろく怨を罵り聞かせて、又胸元より腹へかけてズタ／＼に深さ二三寸ほどづつ切れば其人七轉八例し虚空を掴んで苦しむ。看客は皆肝をつぶしておどろけり。

種明し。彈力强き針金を螺線のかたちにして巻きて、伸縮自在ならしめこれを小刀の根の所即ち柄の附けぎわの所につなぎ、

夫より柄の中へ入れて柄かしらにて止め置くべし。小刀の身は跡先刃を附けず(これは過つて怪我せざる用心なり)中程の所のみ刃を附け置き紙また木などを切りて看客に示し天晴れわざ物のよし述べ置くべし。扱手に赤インキを含ませる綿をかくし持ち斬る度び絞り出すものとす誰か目に見るもまことに斬りし如く見えてものすこきものなり。

(小刀おとしの法)。天井にさしてある小刀を地にある銅貨の上へおとします是れを名命て引力の作用と申します、チリ、ント落す。

種明し。先づ手の内に水のふくみたる綿を隠し持ち、小刀を天井にさし込む時小刀を強く握れば水は絞り出されて小刀に傳ひ落るものなり、其水の滴落ちたる所を注意して見て居てすぐ其上へ銅貨をおきて而して天井をとん／＼と突けば則ち

小刀は銅貨の上へ落つ。

(白紙をうごんに變す)。先づ一枚の白紙を取り、よくその表裏を檢め、指先にてしごき折り、それを手の中に揉み込み、その先の方を少さく取りて、殘の部分では蠟燭の灯に燃し、直ちに細き白絲の紙と變化させ、尙ほそれを井に入れ、その中へ水を灌ぎ、箸にてかきまはし、忽ち饅飩にいたして喰べて視せるなり。

種明し。先づこの手品を演づるには、テーブルの上に火を灯したる蠟燭と一箇の井鉢及び白紙を置き、夫よりその白紙の一枚を取りて、看客に示しながら、「これなる一枚は決して種や仕掛のあるものでありませんからよく檢めて御覽に入れます」といひながら表裏を裏返し、扱て御試験が濟みましたらといひながら態と五本の指を開きて手の裏をば視せながら、白紙を指頭にてしごきながら折り直ち

に右の食指と拇指との間に移し取り、更に手の中に疊み込み、其先の方を一寸ほど出して少々ちぎり去つてから燃す。そのバット燃へ付く送端に巻き込みたる白糸の種を取つて左の手の中に残つて居る紙の丸めたのとすり替へる。この白糸の巻込種とは、白紙を長く貼り續ぎて、それを一分ほどの巾に及物にて截ればよろし。それでこの種は帶の間なり、乃至はテーブルの後方の如き、取易い場所に隠して置く。これを「火焰にかけます」と一品變らせて御覽に入れます」といひながら、看客の方を蒐めてボンと放ると白き絲を引きたるが如き光景で、それを手早く手元の方へとたぐり込み、なるべく量が多いやうに視せ、「これより饅飩にいたして御覽に供します」といひながら、井鉢を叩きてよくその内外を檢め、直ちにその井鉢へ白絲紙を入れ、傍の水指器の水を注ぎ込み、箸にてかきまはしな

がら饅餠を挟み出し、ツル／＼とそれを喰べて視せるなり。この饅餠は白紙に包みたるまゝ、テーブルの後方に隠して置き、白紙を手元にたぐり戻す際に、看客はその白紙の方に氣を奪はれ居れば、その際に白紙の中へ隠し、そのまゝ井鉢へと加れ水を注ぎ込み、箸にてかきまはす振をいたして、紙を端の方にかきよせ、饅餠を箸にて挟み上げて喰べて見せるなり。

〔三三三〕 酒席遊藝

酒席遊藝と一口に言ふものゝ、範圍は中々廣く、其の數多し。伊勢音頭のヤトコセも是れ酒席遊藝の一種とせざるべからず。又地方によりては其地方にて持てる必要のものあらむ。されば大都會にて粹と言はるゝ者の酒席遊藝を標準とすれば、是れにも自ら序破急の順次ありて「一ツおやんなさい」喃かんとの注文あれば、しんみりと都々一、端うた。破となれば靜かなる踊り、ちやり舞。急になれば三下り物の流行唄か何か、メチャ／＼にてお仕舞になるが如し。淨るり物は一座の好むよき時に演ず。依て先づ酒宴用の小うた、さわぎ歌、ちやり舞の藝の種類名稱を示すべし。

(一) 端歌の種々。即ち左の如し。

色氣ないとして。一夜あくれば。爐びらきに。葉ざくらや。春雨に。初秋や。はすの葉に。ほんのりと。ほのくんと。思ひ込んだる。おくる玉づさ。親の譲りの。和歌の浦には。わしが思ひは。我が戀は。變らじと。蚊やり心。風吹いて。可愛がられた。枯野めかしき。

(二) さわぎ歌種々。即ち左の如し。

かつばれ。權兵衛が種まく。沖の大船。いたこ出島。姉さん本所かへ。申上ます。正々堂々。うさぎく。清談判。名古屋甚句等。

(三) 藝廻し。酒席にては、興盛んなれば藝まはしは免れず。其の時順次にお箱を浚け出すは、一般普通凡そ左の種々ならんか。

二上り文句。都々一。迫分。大津るぶし。海晏寺。角力甚句。淺くとも。三下り

文句等。此の他に落語、二〇か、輕口、手品、阿房だら經もあらむ。

(四) 流行歌。酒席にては、是非流行歌を歌ふ。是は最も新らしきを歓迎す。

(五) 拳。酒席にては、拳も遊藝の科なり。これには、本拳、藤八拳、粟餅つき拳等の種々あり、又ナンコと云ふ薩摩拳あり。

(六) 淨るり長歌物。これは清元。常磐津。河東。宮本。一中。豊後。新内。源氏節。義太夫。浮れ節(即ち浪花ぶし)。長歌。地歌等なり。

如上の他に、人によりては、謳をうたふもあらん。しまひを無ふも有らん。顔藝する者、坐敷遊戯を巧みにする者もあらん。千差萬別なれども、歸する所は人生の娛樂と思へるならん。呵々

〔二四〕 淨瑠璃

淨瑠璃は人の事跡に節を付けて語るもの、稱なり。而して之れを三絃に合はすなり。京阪にては義太夫節のみを淨瑠璃と言傳へ來りたれど、是れ淨瑠璃の一部にて義太夫節の淨瑠璃と言はざるべからず。此の他の淨瑠璃は、今の東京たる地の、江戸なりし頃に作り始めたるものにて、清元、常盤津、富本、一中などの諸節起れり。此の他に新内、源氏節、淨れ節など、等しく人の事跡に節を付けて語り、三絃に合するもの故、淨瑠璃に屬す。最も古きは、義太夫節の淨瑠璃にて、徳川幕府時代に、近松門左衛門作り始めたるを、攝津の天王寺村の農人竹本義太夫なる人語り出し、三絃に合せたりと言ふ。而して後は操り人形を使ひて、事跡

の身振りを爲させ、語るに合せて動かし、始めて大阪道頓堀なる竹田劇場にて興行せしより、斯道大に行はれしなり。

(一) 義太夫淨瑠璃の種類。これは淨瑠璃本とて、書籍と爲れり。稽古本は五行に爲したるを以て、五行本とも言ひたり。種類は凡そ左の如し。

菅原傳授手習鑑。壇浦兜軍記。朝顔日記。鎌倉三代記。伽羅千代萩。國性爺。繪本太功記。本朝廿四孝。一ノ谷嫩軍記。奥州安達原。新版歌祭文。碁太平記白石。花曇佐倉曙。艶容女舞衣。蝶花形名歌島臺。明鳥雪曙。假名手本忠臣藏。傾城阿波鳴門。加賀見山舊錦繪。御所櫻堀川夜討。道中膝栗毛。三十三間堂棟由來。近頃河原達引。傾城戀飛脚。義經腰越狀。伊賀越道中双六。戀娘昔八丈。玉藻前旭杖。妹脊山婦女庭訓。義經千本櫻。關取千両幟。箱根靈驗。壁仇

討。阿漕浦鈴鹿合戦。時雨炬燵。平假名盛衰記。忠臣二度目清書。神靈矢口渡。近江源氏先陣館。關取二代鑑。攝津合邦辻。祇園祭禮信仰記。日吉丸稚櫻。桂川連理。八陣守護城。深模様妹春門松。戀女房染分手綱。播州皿屋敷。金比羅利生記。花上野譽石碑。彦山權現誓助刀。岸姫松等なり。さわり。淨瑠璃を語るには、語り始めを枕と云ひ、詞あり、さわり有り。さわりは聲を銜ふ所にて、最も賞美するなり。節には、ギン、ブンヤなど種々あり。左に最も多く賞美するさわり文句二三を掲ぐべし。

○二十四孝十種香之段

モウシ勝頼様、親と親との許嫁、ありし様子を聞よりも、嫁入する日を待兼て、お前の姿を繪に書せ、見れば見る程美しい、コンナ殿御と臥漆の。身は娘御前の

果報ぞと、月にも花にも楽しみは、繪像の傍で十種香の、煙も香華となつたるか
 回向しやうとて御姿を繪には書しはせぬものを、魂返す反魂香、名畫の力もあるなれば、可愛とたつた一言の、お聲が聞きたいと、繪像の傍に身を打臥し流涕焦れ見へ給ふ。

○菅原寺子屋之段

御臺若君諸供に、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛釋迦牟尼佛、六道能化の弟子となり、賽の河原で砂手本、いろは書子は敢なくも、散ぬる命是非もなや。明日の夜誰か添乳せん、らむうわめ見親心、劍と死出のやまけふこね、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立別、鳥邊野さして連歸る。

○三勝半七酒屋之段

今頃は半七さん何處に何してござらうやら。今更かへらぬ事ながら、妾と言ふ者
 ないならば、舅御さんもおつうに免じ、子までなしたる三勝どの、疾より呼入さ
 しやんしたら、半七さんの身持も直り、御勘當もあるまいもの、思へばく此園
 が去年の秋の煩ひに、寧死んで了ふたら、斯した難儀はあるまいもの、お氣に入
 ると知りながら、未練な妾が輪廻廻る、添臥は叶はずとも、お傍に居たいと辛抱
 して是までいたのがお身の仇、今の思に較ぶれば、一年前に此園が、死ぬる心が
 附かなんだ、堪へてたべ半七さん、わしや此様に思ふて居ると、恨みつらみは露
 ほごも夫を思ふ眞實心、猶いや増る憂思ひ。
 (二)清元淨るりの種類。多く賞するものは、凡そ左の如し。

喜撰。梅の春。老松。落人。北州。小紫權八。吉原雀。雨乞小町。高尾懺悔。夕
 立。玉屋。三社祭。都鳥等なり。
 (三)常盤津淨るりの種類。多く賞するは凡そ左の如し。
 小鍛冶。七草。將門。角兵衛。宗清。五人囃。うつば。おつま。三社祭。おその
 六三。梅川忠兵衛。關の扉。乗合船。
 清元。常盤津の淨るり文句。人の最も多く語るは、清元にては梅の春。常盤津に
 ては將門なり。これを一淨るりづゝ左に掲ぐべし。
 ○梅の春 (清元)
 春景色浮いて鷗の一イニフ三イ四ウ、いつか吾妻へつくばねの、彼の面此の雨の
 都鳥。いざこと問はん惠方さへ、萬づ吉原さんや堀寶船こぐはつがいに、好い初

夢を三つぶとん、辨天さんと添ひぶしの、花の錦の装り夜具、はたち斗りも積み
重さね、蓬萊山と祝ふなる、富士を脊中にやがための、しほじり長く居すれば
ほんに田舎もましばたく、はしば今戸の朝煙り、つゞく竈の賑ふて、千秋樂には
民を撫で、萬歳樂には命ちを延ぶ、しゆびの松が枝竹ちようの、わたしもある身も
時を得て目出度く此に隅田川、つさせぬ流れ清元の榮へ壽ぶく梅が風幾代の春や
香ふらん。く。

○將門 (常磐津)

嵯峨や御室の花ざかり、浮は氣な蝶も色かせぐ、廓の者に伴られて、外めづらし
き嵐山、それ覺てか君さまの、袴の春の臙染、臙染ならぬ殿ぶりを、見そめて
初めて恥かしの森の下露、思ひは胸に、光國さんと言ふことは、其のをり知つて

明暮に、女の念が今日の今、届いて嬉し此仰せ、疑ひ晴らし下さんせ、やいの
くど取すがり赧らむ顔に袖屏風。

(四新内。これも源氏節と共に、東淨るりと云ふ故、淨るりの文句一例を示さむ。

○明烏夢の泡雲

浦里跡を打眺め、涙に呉て居たりしが、エ、お情あるお詞なれど、コレ計りは何
も忘られぬ、お赦しなされて下さんせ、未だ此上に何の様な、悲しい苦しい責苦
でも、妻や厭やせぬ何なつても、思ひ切れぬ、いつそ添れぬ物ならば、一緒に死
たい時次郎さん、殺して下さんせ、死たいわいのふ、昨日の花は今日の夢、今は
わが身につまされて義理と云ふ字は是非もなや、勤する身のまゝならぬ、別れと
ならば今更に、去しとむなき離れざわ、エ、此苦しみに引代へて、アノ二階の三

味線は、何時ぞや主の流連に、寢衣の儘に引寄せて、互に語る樂しみも、今宵は引變へ今頃は、何處に何してゐさんすやら、逆も添れぬ二人が身の上、ハアツ味氣なき浮世ぢやナア、好た男にや妾や命でも、何の借かる露の身の、消ば怨もなきものを、コレ縁り悪い女郎に使はれて、思はぬ苦し堪忍しや、今宵に限り此雪は何の報いぞ寒からう、可愛やのう、イエ／＼わたしや寒うはなれども、時次郎さんは彼の様に、若い衆に毆かれさんしたが、おまへは悔しうムんせう。妾しや悲しうてならぬわいのう。よう言ふて給つた。そなたまでが其の様に、主を思ふてたもるもの、妾しが心を推量しや。何の因果で此様に、いとしいものか、さりどては。

(五)浮れ節。この淨るりは最も通俗的なり。左に一例をあぐべし。

○義經安宅落

フシ「旅の衣は篠懸の、露けき袖やしぼるらん、實に鴻門の楯破れ都の外の旅衣、日もはる／＼と越路の末、思ひやるさへ果敢なけれ。時しも文治三ツの年、頃は更衣月の十日の夜、月の都を迷ひ出て、九郎判官義經公、讒者の舌頭に惱められ、兄頼朝公とは不和となり、さて御供の人々には、龜井、片岡伊勢、駿河、御廐喜三太、鷲尾の三郎や武藏坊、辨慶一人、先達の姿となりて山伏の未だ習はぬ旅姿、中に哀は卿の君はや七月の身重にて履き慣れざらん草鞋履き、重荷に都を後に見て、落ち行く先は何處ぞや、黄金花咲く陸奥國の、伊達の郡は平泉、御館太郎秀衡の、館を指して急がる。袖の篠懸露霜を、今日分けそめていつまでも、限りもいざや白雲の宮居久しき神垣

や一松の常盤の木の芽山一、柚山人の板取川、川瀬の水の淺瀬津や一、末は三國の湊なる葦の篠原波寄せて、靡く嵐の一烈しきは。花の安宅に差かゝり一、富樫の左衛門成澄一、經の間合や山伏問答一、辨慶さそくの勸進帳一が如何なる一のか次一の段。」

第五編 處世心得

〔一〕 致富捷徑

致富の捷徑は、株式又は期米賣買の如き投機に手を出し、目的通りに利ひ得るは何よりも早き捷徑なり。然れど是れ運づくにて、損益勝敗必ず知るべからず。神の如く見込立ちて、勝敗を誤らざるに相違無くば即ち致富の捷徑なり。併し左様なることは先は稀なり。依て思ふに、致富の捷徑は成功の秘訣を知り、且つ、戊申詔書の御文中なる「忠實業に服し、勤儉産を治め、華を去り實に就き、荒怠相誡め自疆息まざるべし」を堅守し、利得の爲めに臨機の處置を爲すは真正無二

の致富の捷徑ならんか。我が維新の際の好機に乗じ、一代の富を得たる岩崎、大倉、藤田諸氏の如きは他より見れば捷徑を進みたるが如き跡あれども、其常人に於ては、必しも捷徑と認めて進みしに非ざるべし。大阪の丸萬氏が、空手より起り、食品を美味にして康價に賣らば、是れ何よりも富の捷徑なりと確認し、専心一意此の捷徑を迎り進みしが如きは、是れを捷徑なる可し。又、地主として財産を増せし者、自然の間違無き地價後上りを認めて買占めたるが如きは、捷徑を進むに志して目的を達せしなり。要するに丸萬式、後上り成功地主が、辿り進みし行口に倣ふを致富の捷徑と爲さば、各人思ひ半ばに過ぎむ。讀者以て如何となす

(二) 成功秘訣

(一) 至誠を以て一貫すべし

事業の成功は至難なるものにあらず。能く好機を見るに明ありて、時運未だ至らざる時に當りては、第一に至誠を以て善く人に即ち有力者に忠事するを實行し己れの成功の引船たりと確信せし人には、献身的に仕ふるなり。兎に角豊臣秀吉の行口をば、冷眼を以て静視洞觀すべし。其の始め遠江に行き、松下嘉兵衛に忠事して主人の信用を得しに非ずや。されども傍輩の妬みに依りて去らざるべからざるに至り、去るに臨みても主人は去るを惜みて恩物を興へたり。織田信長の天下に覇たるべきを洞觀し、献身的に忠事して無二の信用を取り、引立られて勢力

を殖し、光秀の叛にあひ、依るべき有力者を亡ひたれども、尙ほ誠實を盡して弔合戦に勝ち、爾來幸運に乗じて官位人臣を極むるに至れり。今日事業の成功も何ぞ之れに異ならんや。成功の秘訣とて、別に手品の種の如きもの有るに非ざるなり。秀吉の心がけあり、誠意あり、堅忍不拔の忍耐と志氣の勇とあり、能く事ふべき有力者と好機とを知り、特に時運に遭遇せし経路こそは、成功の秘訣に非ずや。一躍大成功を成したる岩崎氏は土州候に依り、大倉、藤田諸氏、其他何れも其の始めは獨力にて立ちしに非ず。之を信じて重からしめたる信長的の有力者あり。されど業の取付に助くる有力者無きも憂ふる所にあらず。無きほど却つて己れの鍛練に資す。又、取付の業は、おでんや、氷屋、竹の皮屋、薪炭商に限らず何なりとも相當の業を営み、心がけと行口とを至誠の神髓に倣は、即ち成功の秘

訣にて、深く之れを玩味熟慮して自得すべきなり。尙ほ左に歐米成功哲人の物せし成功原則を掲ぐべし。

(二) 成功原則

- 1、成敗は心がけの如何に在り。
- 2、資本を得るは貯蓄に在り。
- 3、一度自己の希望せし營業と同一種類の商店の手代たれ。
- 4、借りたる資本は危険なり。
- 5、正直、親切、丁寧なれ。
- 6、現金取引に限る人と信用取引を許すべき人とを判別すべし。
- 7、人は自ら福運を作るべし。

8、勝利の秘訣は堅忍不拔にあり。

(三) 成功は蓄積の結果なり

現今著名なる幾多の紳士富豪を研究するに。彼等必ずしも非凡の天才を有せしに非ず。唯だ少年青年時代に於て、常務を終へたる後、通常人が怠惰、休息、交際等の爲め、無益に空費し去る時間を、成べく有益に使用したる結果に過ぎざるなり。世間は固より非常の天才に乏しからざれども、凡そ天下の大事業は、斯る者等に由つて成功せしは稀にて、寧ろ誠實に勉勵したる運鈍の人物に依つて着々成就せしこと却つて多し。即ち平凡の者と雖も、能く時間を惜み、精力有らん限りを盡して、誠實に勉むれば積りつもりて大なる成功となるなり。

(三) 貯金運用

(一) 貯金と獨立 總ての青年は毎度貯金の忠告を受く。然れども彼等の多くは此有益の忠告に對して馬耳東風毫も顧慮するなし。焉ぞ知らん、貯金は他日諸子をして獨立の人たらしむるの偉力を有するを。

青年の多くは曰く、人生僅か五十年、須く今の時に當りて存分の快樂を盡すべく意を貯金に勞するが如きは抑も野暮の骨頂なりと。然れども是れは大なる誤解なり。若し諸子にして其青年時代に於て此用意を欠き將來に於ける獨立の計を樹つるに失敗せんか、齡愈々老て貧増々加はり、意氣銷沈只管人の救護を思ひ、人として終に其獨立を失ひ、命を他に聞くの止むなき末路に陥るべし。

(二)貯金の第一義 吾人は青年諸子に勸告するに貯金の必要を以てす。而も將來有益なる業を爲さんが爲に今日須く貯金すべしと勸告する者なり。金銭の貯蓄は要するに他の高尚なる目的を達する一の手段なり。

(三)貯金は困難にあらず 貯金は猶ほ他の習慣の如し。當初は之を實行すること非常に困難なるも、回を重ね度を重ねるに随ひ當に容易なるのみならず、竟には機械的自働的となり之を爲すに何等の困難を感ぜざるに至るもの也。

諸子は諸子自身に獨立の計を樹て、諸子自身に時を制し以て一身の自由を得よ。一身の自由は獨立の行爲を要し、行爲の獨立は貯金より來る。吾人は吳々も勸告す。貯金は諸子將來の獨立を得る捷徑にして、又成功の一大動機たることを。

〔四〕 株式利用

貯金の必要なることは今更くごくしく説明する迄もなし。問題は其の蓄積せる貯金を如何に處分すべきかにあり。彼徒らに銀行の勘定尻や定期預金の証書をのみ眺めて、獨りホク／＼たる者の如きは、餘りといへば無能ならずや。經濟界進歩の今日、有價証券殊に株式の利用こそ利殖の最良法なれ。保管の簡易なる、只一枚の紙を貯ふ迄なれば、平素は之を金庫の裡に收め置かうと、銀行へ保護預けにして置かうと、時期さへ來れば利益配當若くは利金の受領は何等の手数を要せず。之れを家賃小作米の取立に比すれば雲泥の差あるのみならず、流通力に至ては殊に最も便利なる條件を具備せり。尙ほ吾人が有價証券の放資を懲懲するは

獨り貯蓄に代ゆべきものとしてのみならず。盛んに商工業を營み居る者にて、時に依ては商況不振の場合に遭逢して頓と収入のなき場合、若し豫め資金の一部を割て有價證券に投じ置きしならんには、其利益配當は其時の助けとなるべく、又一家の主人が不幸一朝頓死しやうとも其遺産の幾分が有價證券なりしならんには若き妻も幼き子女も安んじて其利子又は配當にて衣食せらるべし。斯く子女の手にも保管の容易なるは有價證券を措て他に何かある。尤も有價證券と云ふ中にも、自から種々の別あり。隨て相當鑑識を要するは云ふまでもなく即ち之れが内容、撰擇且つ如何にせば最も安全確實なるかを考究せざるべからず。諸種の誘惑におちり定期に手を染むる如きは最も危険なりと知るべし。

〔五〕 期米相場

期米即ち俗に所謂米相場にして、純然たる投機的なり。隨て此は決して君子の關すべき事業にあらず。蓋し相場なるもの、幸に觀察其當を得て巧く機運に乗ずる時は一攫萬金亦朝飯前の容易事に屬し、之に反して觀察其正を得ざらんか、幾萬の富も黄梁一炊の夢より果敢なし。蓋し相場は宛然暗中摸索なり。而かも人世萬事一寸先きは暗黒といふ中に、經驗てふ先覺的腦力と、研究てふ智識に依ては暗中亦幽かに曙光を認めらる。況んや相場は相場の相場に非ず宇宙の相場なり。而して宇宙の原理は因なくして果の來るを許さず。即ち高下には自から高下の理數のあつて然るものにて、其高下の素因と、人氣感應の速鈍とを推歩して、虛心

之を考察せば、兵法の所謂百戰百勝の秘訣必ずしも至難にあらざる也。只夫れ虚々實々、變幻端倪すべからざる斯界、人は兎角眼前の幻影に迷ふて往々進退を誤まる、是れ失敗者の多く成功者の少き所以なり。

蓋し商戦は猶ほ兵戦の如く、而して軍に兵法あると同じく、相場には亦相場的略あり。爰には只左に相場をする上に於て何人もせひ心得べき一要件を記す。

要件とは何ぞ。損失豫防及び資本運轉に就ての得心是なり。古人も云へり、商をせんとする節最初損銀の積りをなすべしと。

抑も損失を大ならしむる其原因を究むれば、實に損金を惜むと云ふことが唯一の原因たり。而して此の過去の損金を惜んで引かれ玉に追敷をするに云ふが最も相場帥の禁物たり。勿論初より一圓切張つて見やうと言ふ如き都合にて追敷するな

らば兎に角、始めより其を豫期せず漠然たる考を以て着手するは、實に之れが損を大ならしむ。即ち無制限に損失する原因たり。

又或る成功者の談に、己が資本の三分一を以て商ひに取り掛る人ならんには大概成功するも、一パイ根こそげ袂の糞まで持つて行け主義の張り口では、逆も成功覚束なしと。さて實際には甚だ行ひにくきものなり。何が故に行ひ難きか、蓋し人情の弱點は大きく儲けんとすることにのみ腐心し、少しも損といふ點に思ひを及ぼさぬに依る。無論誰しも儲けんと欲すればこそ相場をなす事なるも、所謂敵を知り味方を知るといふことが此の權道の最も必要とする處にして、只己れを知るも敵を知らねば必ず不覺に終るが相場の常なり。即ち此不覺を未前に覺悟して着手するが斯道第一の要訣たり。

〔六〕 就職案内

無職の人が職業に就くは、無資本なれば雇はれ人に住込むなり。併し他に周施を頼みて早速に合ふたり叶ひたる口有れば可けれども、さも無くば徒らに持居るを得ざる場合有らん。さりとして口入屋、即ち紹介所に就くとも、思ふ様に住込めざることもあるべし。されば人力車を賃借して、日夜の稼ぎ賃を得るもあらん。地方にては、農家の作男等種々あり。凡そ男女通じて就くべき業科は、

(一) 工業にては。衣服類の仕立師、編物師、寫字師、諸職工の下職種々、帽子洗濯業、包紙敷紙製造業、紙袋貼業、刺繡工、

(二) 労働業にては。雇はれ人、仲仕、人足業、人力車夫、荷車使ひ、作男、新聞配達夫、牛乳配達夫、郵便配達夫、

(三) 商業にては。新聞賣捌業、露店古本商、牛乳賣捌業、小間物の地方行商、賣藥の行商、寫真行脚、煎餅類受賣行商、焼芋の行商、夜間飲食物行商、夏季は氷屋冬季は安牛肉店、安荒物屋、石油行商、露店的餅屋、同果物屋、縁日商、

(四) 給取にては。官吏の側ならば巡査と爲るは最も容易にて、少しく法律を辨へ居れば、試験には容易に合格すべし。然れども満二十歳以上ならでは採用せられず。其れまでは官衙にても學校にても又は會社にても、傳手を求めて給仕を勤むべし。これは日給は多からざれども、家へ歸りて後勉強するの餘暇あり。且つは日々に事務を見習ひ居れば、更に他日普通の傭吏に昇進するの便あらむ。満二十歳以上になりて如上述べし所の巡査を志願すべし。これは各府縣何れも、大抵一

年には二回以上、新聞に廣告して募集し、東京なる警視廳にては、毎週二回採用試験を爲すものなれば、注意して其の寡りに應すべきなり。

次は運輸従事員なり。これは停車場の改札、出札、車掌等の總稱にて、電車も亦然し、年齢十六歳以上は採用する故此の募りに應すべし。此の學術の試験は、讀書、算術、作文、習字等、何れも低度のものなる故、小學卒業者にて十分なり。次には通信事務員なり。即ち郵便局の備にて、是れ亦小學卒業者なれば採用せらる。初期は日給にて、漸次昇進して通信手となれば、月給を給せらる。尙ほ年功を積みて通信屬となれば判任官となる。其他前途多望のものを今一つ記さん。是れは水夫、火夫にて、之れを養成しつゝ、あるは、日本海員掖濟會と稱し、本部は東京京橋區元數寄屋町一丁目にて、横濱、品川、大阪、神戸、函館、長崎、門

司、佐世保等に出張所あり。これを志願し得る者は、年齢十六年以上にて、身体強健ならば宜しきなり。別に願書も要せず。戸籍謄本を携へ、口頭にて申込みは宜しきなり。而して採用せらるれば、初めは見習として内國、又は外國航路の汽船に乗組ませられ、其の間費用は掖濟會より辦するなり。斯くて三ヶ月の後、水夫又は火夫の本職に就き、品行方正にて且つ勤勉なる者は、掖濟會にて撰拔し、高等海員養成所に入れ、終には運轉士、機關手、機關長たるを得るなり。

〔七〕 各種學校入學案内

(一) 小學卒業生の直に入り得る公立學校(但し三府に於る)

(東京府) 青山師範學校。府立第一中學校。同第二中學校。同第三中學校。同第四中學校。府立染織學校。府立工藝學校。府立園藝學校。府立職工學校。

(京都府) 府立師範學校。府立第一中學校。同第二中學校。同第三中學校。同第四中學校。同第五中學校。府立醫學專門學校。府立農林學校。府立美術工藝學校。市立染織學校。市立商業學校。市立商業實習學校。

(大阪府) 大阪醫科大學。市立高等商業學校。天王寺師範學校。池田師範學校。府立北野中學校。府立堺中學校。府立八尾中學校。府立茨木中學校。府立天王寺中學校。府立岸和田中學校。府立市岡中學校。府立富田林中學校。府立四條畷中學校。府立今宮中學校。府立農學校。府立職工學校。府立大阪工業學校。

(二) 私立中學校(三府に於ける)

(東京府) 東京開成中學校。攻玉社中學校。日本中學校。早稻田中學校。京華中學校。京北中學校。ドイツ協會中學校。東京中學校。國民英學會。正則英語學校。正則豫備學校。淨土宗第一學校。慶應義塾大學豫科。大成學館高等豫備門。正則中學校。中學郁文館。商工中學校。麻布中學校。立教學院中學校。曉星中學校。第一佛教中學校。青山學院。中等夜學校。天臺宗東部中學。豊山中學校。錦城中學校。順天中學校。成城中學校。日比谷中學校。明治學院。荏原中學校。海城學校。東京航海學校。日連宗大學林。曹洞宗第一中學校。正教神學校。

(京都府) 吉田中學校。同志社普通學校。眞宗京都中學。花園學校。古義眞言宗聯合中學。日連宗高等第一部。智恩院中學。新義眞言宗中學。

(大阪府) 桃山中學校。泰西學館。東洋義塾。淨土宗教區聯合學校。大阪東雲學校。大阪普通學校。海士學館。

〔八〕 男女内職

内職は男子のみの爲すべきものあり、女子のみの爲すべきものあり、男女通じて寄り合ひて爲すべきものあり。事は種々なり。

(一) 男女通じて爲すべきもの。これは凡そ左の諸科なるべし。

寫字、紙箱はり、寫眞の臺紙貼付、團扇の骨けつり、石版繪の彩色、諸竹細工、紙細工、布細工、針金細工、硝子鏡の裏付、造花、粘土細工、インキ製造、蠅取紙製造、状袋等總て紙袋はり、吳服の文庫はり、小器の仕揚、(二) 重に女子の爲すべきもの。これは凡そ左の諸科なるべし。
衣服裁縫、縫とり、ハンケチの耳縫、毛糸其の他の編物、押繪、巾着類の製造、

洗濯、マツチの箱はり、足袋の先つけ、全甲はせ付け、玩具の修理、此の他、右の男子共通の仕事等。

以上の内にて獨習し得べきものを、聊か左に示すべし。

(ハンケチの縁とり)。これは普通の針にて縫ふなり。針道の付きたる人ならば、さほど熟練を要せず。三四回試みば、自然と針の手定まらむ。

(縫とり)。これは縁とりより進むなり。器具は角どめ針にて用足る。爲し始めは木綿布に思ふまゝなる縫取を試み、大抵之れにて好しと思はば、實地にかゝるなり。ハンケチ地には、白粉にて型を押しあれば、三この絹糸にて、其の模様を一針に縫ひ取るなり。縫取はじめは、ハンケチの一遇か、若くは四遇に縫取を爲し追々上達するに従ひ、机かけ、窓かけ、進んでは種々の美術品に及ぶなり。

(編物)。最前は涎かけ、帽子、肩かけ等の容易なるものより習ふを可しとす。手ほごきには靴下、手袋の如きを編み始むるを便利と思へど、それは思ひちがひなりの涎かけなどは太き糸を使へども、靴下などは細き糸を使ふに限られたれば、手が細くなる故、初心者は編み難し。總て巧手に造りたるものは、自ら光澤の添ふもの故、製品が稍光澤出づる様になれば、それにて始めて一人前なりしと知るべし。

(編物に用ゐる針)。これは獨逸のヘーゲル製を使ひやすしとす。太物、細物、中細物、極細物の四種にて、各々十番より二十番までの長短あり。鈎に角製と金屬製とありて、これも亦一番形より十二番形までの大小あり。

(編物糸)。糸も亦細、中細、太の三種あり。尙又多く用ゐられども極太も有なり

(針の持方)。糸の掛け方も大切なるが、むつかしきは糸の巻き様なり。堅く巻けば糸延びて長くなるべし。殊に毛糸は甚だしく延び、一度延びたるものは、故の形ちになり難きもの故、其の手加減に注意せざるべからず。

(造花)。これは初めに、葉又は花びらの色の染め方を稽古すべし。材料としては絹地其の他種々あれども、普通に稽古用として多く使はるゝは寒冷紗なり。之れを葉の緑色、又は花の淡紅に染め、次に葉の形ち、又は花瓣の形ちに切り出すことを習ふなり。是れには打抜とて器械ありて、菊の葉、苗薇の葉、梅、櫻の花弁など一定の形狀を容易に抜き取り得るなり。